

社会・地域・暮らしをつくりなおすマガジン

まじくる

2012

2

月

特集

社会的包摂とは？

【インタビュー】

社会的包摂とは何か？
湯浅誠さんに聞いてみた

【地域実践例紹介】

課題に向き合う最先端のまち釧路
コミュニティハウス冬月荘

【実践レポート】

①被災地「寄り添いホットライン」

②女川「社会的企業」

●「何でも」を検証する／朝比奈ミカ

●マンガ まじくるんが行く

●異分野対談 「スタートトゥデイ 大石亜紀子さん」

●制度のこともくっちゃべるんだべよ／又村あおい

●高校生が先生に聞きました 「釧路公立大学 小磯学長」

社会的包摂とは？

地域課題を解決するために
これからわたしたちが
できること



「社会的包摂」という言葉がずいぶん
と聞かれるようになりました。言葉の
意味としては、『社会の仕組みの不都合
によってさまざまな生活上の困難を抱
えて生きづらくなってしまう状態（社
会的排除）の人たちを、社会の仕組み
でしっかりと受け止め、自立できるよ
うにしましょう』ということを示し
て表します。もともとは英語の

「ソーシャルインクル
ジョン」の日本語訳で
すが、何となく聞い
たことがあって、ぼ
んやりイメージは
できるけれど、実
はよくわからない
ところも多いので
はないでしょうか。

ここでは、「社会
的包摂」がどんな意味
で、どうして最近になっ
てよく聞かれるようにな
ってきているのか、そして、
それらは私たちの生活や社会にど
う関係しているのか、について改めて
理解し、整理するための情報を集めて
みました。

まずは、2011年4月に政府が内
閣官房に設置した「社会的包摂推進室」
の室長の湯浅誠さんに「社会的包摂と

は何なのか？ 社会はどうなっているの
か？」ということをもっとく知らない人
が聞いてもわかるようにインタビューし
てきました。

次にそうした社会背景の中で、湯浅さ
んも解決方法の一例として引用している
地域の取り組みとして釧路の「コミュニ
ティハウス冬月荘」を中心とした地域で
のセーフティネットづくりの実践を紹介
します。釧路の実践は、やっている内容
よりもそこに至ったプロセスに重要な要
素が含まれていますので、プロセスをひ
ととおり振り返ってお伝えします。そし
て、釧路実践からわかった実践のコツを
『たまり場』をキーワードにしてわかり
やすくレクチャーしてみました。『たまり
場』は他の地域の実践をみても、共通
する大事な機能です。

そして最後に、釧路の活動から全国の
類似事業を調査、研究することで、出会っ
たりつながったりしていった全国の地域
や活動分野を越えたさまざまな取り組み
を紹介しながら、これからの社会・地域・
暮らしをつくりなおすために必要となる
重要な機能を取り出して、説明します。

社会的包摂について実際に関わってい
る人たちも、まったく知らない人でも、
これから、そうした問題にどう関わって
いったらいいのかを考えるためのきっか
けになればと思っています。

特集

社会的包摂とは？

・社会的包摂とは何か？
湯浅誠さんに聞いてみた2

・課題に向き合う最先端のまち釧路
コミュニティハウス冬月荘8

・まじくるんの基礎講座15

・多様な担い手による
さまざまな取り組み19

・「何でも」を検証する

朝比奈ミカ26

・マンガ まじくるんが行く31

・まじくる実践レポート

①「寄り添いホットライン」32

②「女川社会的企業」37

・異分野対談

スタートトゥデイ 大石亜紀子さん41

・制度のこともくっちゃべるんだべよ

又村あおい47

・高校生が先生に聞きました

釧路公立大学 小磯修二 学長52

編集後記60

2009年頃から、全国のいろんな地域で「社会、地域、暮らし」に向き合うさまざまな実践者に会って話をする機会が多くなりました。私の場合は長女が重度の障がいをもって生まれたことがきっかけで、否応なく突きつけられた今の社会への違和感や矛盾から、同じ思いをもつ地域の人たちとともに地域づくりのNPO実践へと足を突っ込むことになりましたが、似たようなことをしている人たちはどんなことを感じ、気づき、大事にしているのか？ その謎を知りたくなったのです。

その実践はいろんな分野、いろんな立場、いろんな形態、いろんな地域ととにかく多様性にあふれているのですが、どこか「同じ匂い」を感じていました。その何だかまだよくわからない感覚的に重要なものが、このたび「まじくるん」というキャラクターになって現れたのです。まじくるんはしきりと私に『情報発信をしようよ』と誘ってきました。これだけ業界や分野をごちゃまぜにしたレポートはかなり冒険的、挑戦的だとは思ったのですが、あまりにまじくるんが熱心に誘うので、「まずは、やってみるしかない」とこの怪しげな雑誌を刊行するにいたりしました。

(日置 真世)

これを読んでいる
君はどんな立場だろう？
地域で何かの活動を
している人たちかな？
生きづらさを抱えている人たちを
応援している人も多いよね。
ひょっとしたら、社会が自分にとっては生きにくくて
悩んだり困ったりしている人かもしれないよね。
あとは、そうした研究をしている人もいるだろうし、
行政の立場で関わっている人もいるかもしれないね。
いずれにしても、みんな「生活当事者」なんだ。
そう、僕は広い意味で社会や地域や暮らしの
ことを考えて何とかしようと行動する人を、
立場や肩書や所属に関係なく「生活当事者」っ
て名づけて、いろんな生活当事者がつながったり、
まじくったりする機会を仕かけているのさ！
まあ、この雑誌もその仕かけ
の一つってわけだよ。
一緒にこれからの社会や
地域や暮らしを考えていく
きっかけになると
嬉しいな。





湯浅 誠 (ゆあさ・まこと)

42歳で、後厄が無事に??終わって、ちょっとほっとしています。いまは内閣府参与という肩書きで、政府に関わっており、パーソナル・サポートとか電話相談など「社会的包摂(ソーシャル・インクルージョン)」の理念にかかる政策を手がけています。政府としてこういう方面にどれくらい本気で取り組むつもりなのかは……聞かないでください。もともとは東京のホームレス支援活動から出発しており、いまは生活困窮者支援のNPOもやや社会運動団体である反貧困ネットワークなどに関わっています(もやいには最近あまり行けていません)。官民両方にまたがる形で仕事しており、両者の意思疎通を円滑にする「通訳」がもっとたくさん必要だな~とつくづく感じています。縦割り問題には敏感で、行政の縦割りにも民間の縦割りにも、いつも「もうちょっとなんとかならないものか」と思ってごそごそやっています。大きなところでは、いまは半世紀続いた「高度経済成長体制」からの根本的な方針転換に向けた過渡期にあり、新しい社会ビジョンにスムーズに移行できないと、この社会の持続可能性がないな~と思っています。

すが)、基本的には高齢者や障害者など、ひと言でいうと働けない人のためのものという感じだと思っんです。高齢者のためのものと思っっている人が多いだろうという前提で話しているのですが、その前提がだんだん通用しなくなってきていのは、むしろいいことです。

お金で説明してみると、日本の社会保障費という予算があります。全部で100兆円です。おおよっぱにいうと



100兆円のうち、年金が50兆円ちょっと、医療が30兆円ちょっと、介護が7~8兆円です。それでもう9割ちかくになります。医療は我々も受けるけど、基本的に医療費は高齢になればなるほど多くなる。そういう意味で、社会保障というのは、ほとんど高齢者のためといえます。だから、障害者、子ども、失業者、ホームレスなど、その他は全部このわずか10%の予算の間にひしめき合っているとい

うことです。

そうになると、高齢者と障害者以外の人たちには社会保障がないことになります。福祉がないということになります。実際には、障害があっても働ける人は増えてきているし、他方では、障害者手帳を持っていないけど10年間ひきこもっていてすぐには働けないとか、中高年でリストラされちゃったとか、働き過ぎでメンタルを害して休まなきゃいけないと



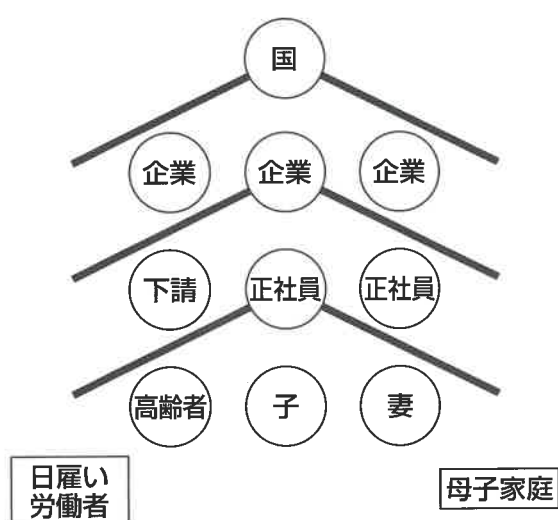
か、そういう人たちが増えています。社会保障はそういう部分には対応できていないということになる。それが制度疲労という意味です。

では、こういった人たちの課題に誰が対応するのかわかっているかというところ、私的なセーフティネットやネットワークです。ここでの私的なセーフティネットとは、家族と地域と会社です。血縁、地縁、社縁、これで支える。

ちょっと前までは、男は大体学校出るまでは父親に養ってもらって、学校を出たら会社で就職して、会社に養ってもらって定年退職までいきます。女は、結婚するまでは父親に養ってもらって、結婚したら夫に養ってもらうものと想定されていました。こうなると、男も女も家族と企業で基本的に定年退職まで暮らせることになるので、人生で社会保障が登場してくるのは夫が定年退職したあとということになる。このイメージで多くの方が、「それが普通でしょ」と思っていたら、家族と企業に支えられない人がどんどん増えてきて、私的なセーフティネットやネットワークも利かなくなってきたのです。そういう人たちは想定外だったからです。

たとえば、非正規労働者ですが、昔か

※3つの傘がしぼむと、雨に濡れるひとが増える



ら非正規で働いている人はいました。主婦パートや学生アルバイトです。この人たちは夫や父親に養ってもらっているという家族の傘の中にいるはずの人たちだったので、別に非正規労働者であっても社会問題にはならなかったのです。ところが、非正規労働者だけでなく家族の支えがなくて自分で暮らさなきゃいけないという人たちが出てきた。企業も、非正規労働者の生活の責任までもつてくれない。そういう人たちがどんどん増えてきて社会問題になった、といえるのです。非正規の人が一人で暮らすというのは、日本社会にとって想定外だったんです。この想定というのを大きくいうと「高度経済成長長期レジーム」といいます。

私の言葉ですが、レジームとは体制という意味です。

日本は1960年代が高度経済成長期ついでにわけていますね。あの頃に、私が、多くの人がこういうふうになっていると言った話が一般化したのです。たとえば、今60代の人にとっては40年ぐらいい前の話だから、20代からずっとそう思っている生きてきたということになる。そこがおそらく、20代とかの若い世代の感覚と、ちょっと上の人の感覚がずれちゃうところなんだと思う。



●では、社会的包摂を進めていく、社会を組み替えていくうえでの重要なポイントは何か？

一つは、従来の制度が想定していない人たちなので、この人たちの共通項は従来の制度に乗っていないということなんです。つまり、従来の制度で想定されていない人というのは、年齢も性別もバラバラで、態様もたとえばニートとか、働き過ぎてちょっと疲れちゃってとか、さまざまです。要するに、高齢者とか障害者というふうにくれない人々たちです。そのなかでも、ある程度はDV被害者とかホームレスとかはくれますが、くくる





のが難しい人たちがたくさんいる。無理やり名前をつけると、ニートだ、ひきこもりだってなるけど、そのなかには病気の人もいれば病気じゃない人もいるというふうには、非常にくるのが難しいわけです。この大勢の共通項は何かというと、今までの制度に乗っていないということです。

そこに社会全体として、公的・私的なネットワークをつくったり、セーフティネットをつくったりしようとしたとき、今までの制度や政策のつくり方とは違う発想が必要になるんです。ここが非常に

難しいところです。

今まで制度や政策をつくるときに必ず最初に求められるのは、「対象は誰なのか」ということです。たとえば、フリーターといえば15歳〜34歳までの男女を指します。ホームレスといえば、公園や道路に故なく起居している人です。

ネットカフェで暮らしている人たちが一時期話題になりましたが、あの人たちは家がないけどホームレスといわない。対価を払って泊まってるから、故なくはない」という理屈です。こういうふうに、制度とは内と外を分けるわけです。制度というのはグレーをつくらない。白か黒かを決める、これが今までのつくり方です。制度ができた瞬間に、こっちの人とあっちの人が必ずできる。それで、こっちの人に税金使いましょうっていう話です。だから、グレーな人は結局、どこにも当てはまらなくて浮遊し始めたという状態です。

それがこの10年ということです。新しい社会問題とか新しい課題といわれていますが、その他方に日本の財政問題があります。これはひとりでいうと、もう借金が多すぎてなかなか身動きが取れなくなっちゃっている。今、日本の借金は千兆円ぐらいあります。ギリシャの財政

破たんの話を聞くとヨーロッパは大変だと思われていますが、おおざっぱにいうと日本も同じような状態です。

この借金は、さっき言った高度経済成長レジームを維持するために使われてきたお金です。最近、私は1970年代にとっても関心があるんですが、「赤字国債、赤字国債」って今言われていますけど、国債が出始めたのが75年なんです。あれからずっと増え続けているということなんです。いつかは挽回できるだろうって思い続けた。またビッグウェーブが来るはずだ。そしたら、こんなものはいつでも返せるよと。



◎まるで、パチンコにはまって抜け出せないギャンブル依存症のおばちゃんと一緒にですね。この間までよかったから、みたいな感じで。

まさにそうなんです。「経済成長さえすれば」って言っているスーツ着たギャンブル依存の人たちが、いまだにいっぱいいます。

高齢者・障害者じゃない人たちがもうもいつぱいいるとみんな気づいているんです。気づいているんだけど、さつき社会保障費について話したように年金



で50兆円です。たとえば、フリーターに10兆円かけられるか、ホームレスの人たちに1兆円かけられるかって話になると、かけられない。もうそんなお金はないからです。

だけどそうすると、既存の枠組みから外れる人が、何の対応もされないのってどんどん増えていく。そうすると、社会的に回らなくなっていくということです。

非正規の人たちは、結婚もできないし子どもも産めないと言われます。調査を見ると、「結婚資金のことが不安で結婚に踏み切れない」という人が、若い男女で40%以上います。そうすると、子どもが減ります。子どもが減ると、高齢者の割合が増える。それを誰が支えるのかという話になる。どう考えても回らなくなりそうですよね。

では、何らかの形で、高齢・障害以外の人たちに公的または私的にセーフティネットを巡らしていかないとけない。それをやるときはイメージするというか全体の理念が「社会的包摂」っていうことです。ちょっと矛盾した言い方になるんだけど、ひと言でいうと、「制度に乗らない人たちのための制度をつくる」っていう発想になるわけです。

社会的包摂（ソーシャルインクルージ

ョン）はヨーロッパで最初に言われ始めたのですが、最初のターゲットは女性と移民でした。ヨーロッパも日本と同じで、30年ぐらいたかきかると女性には「仕事か出産か」という選択肢でした。出産で仕事を辞めるということになると、その人が出産するまでの間に会社などで培ってきたノウハウが社会的に消失してしまう。もったいないと考えるわけです。もったいないので働きたいという人は働き続けられるように、女性が社会参加できるようにしたほうが社会として得だろうという話から生まれたのが、社会的包摂という考え方です。

では、どうやったら社会的包摂ができるかというと、一方に夫の働き方の問題、他方に子どもの保育の整備の問題があります。こういったことに取り組んでいく。そういう課題も社会的包摂の範疇です。



●働けない人たちが今こんなにいるのは、もったいないと考えるとよいですね。

そうなんです、その人たちが生産するようになるためにかけるお金のほうがもったいないという発想が強いのが現

状です。「そんな金かけて働けるようになるのか」っていうことです。

日本は保守主義的伝統が根強く、「日本は、何もない戦後の焼け野原から立ち上がってきたんだ。金かけたり、誰かがついてやるとか、そんなことやるからいつまでたっても働けないんだ。獅子は子を千尋の谷に突き落とす」とかいう話になってしまっているんですよ。

ある調査結果があつて、「世の中に対して不満である」という人が7割ぐらいいる。「頼れるのは自分だけだ」という人が3割ぐらい。「近所の人と十分なつき合いがある」という人が6割ぐらい。これは10か国ぐらいの世界調査ですが、日本はどれも最低です。自分しか頼る人がいないと思っている人の割合が一番高いし、不満をもっている人が一番多いし、近所とつき合いのない人が一番多い。「今の若者たちはそういう不公平で孤立していて、ばらばらの砂粒のよな人間で」といわれたということが1978年に出た本に書いてある。このときに基になった調査は1972年のものです。この調査に答えているのは当時18歳〜24歳の若者で、今56歳〜62歳の人たちです。

高度経済成長期で、みんなが豊かに



なって、その分自立心を失い、甘えた気持ちをもって不満だらけで、権利ばかりを主張して義務を果たさなくなったためにこういう世の中になった。だから、もう一度世の中を引き締め直さなきゃいかん、甘やかしちゃいかんのだという話になって80年代に入っていくわけです。

それが80年代の「増税なき財政再建」といわれるものです。自主・自立・自助が大事で、果てのない要求に依っていたら国は破綻するので社会保障は引き締めしていく、財政再建をしていくという路線で、増税できないからと国債の発行を続けて今まで来ちゃったわけです。



●社会的包摂について言葉ではわかりましたが、具体的なカタチというかイメージはどういうものになるのでしょうか。

たとえば釧路の地域ネットワークサロンのやっているコミュニティハウス冬月荘（8頁に詳述）があるじゃないですか。あそこは、制度に乗らない人たちのためのサービスといえます。冬月荘に集まってくる人たちには、「社会保障で対応されていない」と「企業と家族で対応されていない」という特徴があります。年齢層も広く若い子からおっちゃんまで

います。その人たちがそこに集うことで、お互いに勉強を教えたり教えられたりなんていう関係で支え合っていくようになる。

それは家族と会社と地域とは違う縁です。そこにお金を流すということは、その活動を公的に支援するということです。維持するための最低限の人件費や運営費などの資金を提供して、それぞれの地域の中で公的あるいは私的なセーフティネットを組み合わせたようなものを増やしていくことが、地域から漏れていく人をなくしていくことになるのではない



か。こういった手法が一番効果が大きいかと思います。そこにつながることで、今までの制度には乗らなかった人たちが力をつけていくようになる。そうやって社会を活性化していくことが、社会的包摂の具体的なイメージです。

湯浅さんの話を聞いて

黒のハイネックの怖い顔をした人。取材前、湯浅誠さんに私はそんなイメージを抱いていた。少しでもおかしい質問をしたら怒られるんじゃないかと、私はかなりびびっていた。けれども当日、厳重なチェックを通過して入った内閣府で、湯浅さんはラフなジーンズ姿で迎えてくれた。実際の湯浅さんは、そのスタイル通り、少しも飾らないやわらかなもの腰のひとつだった。

取材の最後に、どうしても気になって、「そこまでやってしまうモチベーションはなんですか？」と聞いてみると、湯浅さんはきっぱり「私がいやだから」と言った。「結局のところ、私がこんな社会はいやだからやっているんです。でも、その理由だけで納得する人は少ないし、協力も得られないので、いろんな理論を開発してきました」と。

だから、湯浅さんは「わからんちに話すこと」を大切に。取材の中で湯浅さんは、私みたいなわからんちんのとんちんかんな質問にも、楽しそうに答えてくれた。全然排他的なところがなくて、違う意見についてもおもしろがって話してくれた。そんな湯浅さんの自然体なふところの深さに、いろんな人を巻き込みながら、一步一步の積み重ねた活動の軌跡を垣間見たような気がした。湯浅さん、素敵な時間をありがとうございました。（ゴンザ）



社会的包摂とは？

課題に向き合う最先端のまち釧路 コミュニティハウス冬月荘

日置真世 Masayo HIOKI

社会的包摂＝社会の組み換えと考えると、実践を見たときに本気になっているのは地方の人たちです。なぜなら、少子高齢化、過疎化、人口減少、地域経済の衰退…などなど生活課題を身にしみているいろいろな立場の人たちが感じているからです。

全国各地でさまざまな取り組みはありますが、まずは自分たちの身近なところから釧路での実践についてプロセスに着目して紹介したいと思います。



最先端の地域「釧路」

釧路は人口が18万3千人あまりの北海道東部の中心都市です。基幹産業は漁業、それに伴う水産加工業、製紙業、農業や観光などですが、10数年前にそれまで地域を支えてきた太平洋炭鉱が閉山し、その後は地域の経済的な衰退化は加速し、人口もみるみる減っています。かねてより生活保護受給者が多く、受給率は50パーミルを超え、今では18人に1人が生活保護を受けているという状況です。当然、失業率は高く、ハローワークには多い日には500人〜700人もの人たちが職を求めて訪れます。また、生活保護を受ける人たちに占める母子家庭の割合が非常に高く、その背景にある高い離婚率も影響してか子どもの虐待件数も多く、学歴は全国比道内比でも低いなど、生活するうえでさまざまな困難を抱えています。

しかし、こうした状況は釧路だけに限ったことではなく、実は全国のどの地域にも少なからず迫っている、あるいは大なり小なり起こっている課題です。そういう意味では釧路は全国的に地域課題の最先端の地域といえます。深刻さを自慢してどうする？と思われるかもしれ

ませんが、釧路が最先端なのは課題のほうではなくそれに向き合う地域の実践のほうなのです。

釧路はもとも注目すべき地域福祉活動が誕生してきたところでした。老人介護の分野では釧路障がい老人を支える家族の会「たんぽぽの会」が徘徊したお年寄りを地域ぐるみで探しだす仕組み「SOSネットワーク」をつくり、今ではその仕組みが全国に広がっています。釧路市役所の生活福祉事務所では2004年から厚労省のモデル事業として「自立支援プログラム」にいち早く取り組み、地域の多様なセクターと連携・協働して独自のスタイルを構築していきました。また、市の財政再建にも大胆に取り組んで



います（関連内容は52頁「小磯学長に聞きました」を参照）。



地域課題を解決の万能ツール 「コミュニティハウス冬月荘」

そのようななかで、支援分野や既存制度を超えて人々の生活を支えていく新しい仕組みとして2007年に地域のプロジェクトから発案されて実現し、発展しながらモデル実施されているのが「コミュニティハウス冬月荘」です。

「コミュニティハウス冬月荘」は釧路駅から車で5分ほどの寺社が立ち並ぶ米町^{まち}という地域にあります。ここは釧路市ができた当初は中心的な地域でしたが、今では高齢化が進み、商店が次々と姿を消すなど、釧路の地域課題の縮図のようなところでは。「冬月荘」はそこへくでんの社員寮として30年来地域に親しまれてきた建物で、閉鎖されていたものを^{※1}NPOが買い取って再利用しています。冬月荘は元社員寮の建物の機能を十分に活かし、日々の活動を蓄積して約5年が過ぎようとしています。1階の20畳の和室はいろいろな人たちが集い、出会う活動の場になっています。なかでも08年1月からスタートした生活保護世帯な

どの中学生の勉強会は11年度5期目を迎え、中高生に安心できる居場所を提供し、多様な大人とのつながりや活躍の機会を創り出しています。また、広い厨房を活用した、仕事づくりと子育て支援を兼ねた親子ランチの営業も年々利用が増え、就労困難な若者や障がい者の就労トレーニングの機会になっています。また勉強会に参加する中高生たちが幼児たちの遊び相手になるなど多様なアクターの活躍の機会にもつながっています。2階のトイレと洗面所を備えた6つの個室と1階奥の居室はこれまでに20人以上のさまざま



冬月荘での中学生の勉強会の様子

まな人たちのニーズとスタイルに基づいた生活の場となり、今では若者たちを中心に見守りや支援機能を備えた共同生活の場として常に満室状態です。



誕生の背景にある「地域主権」

コミュニティハウスが誕生した背景には実は地域主権の動きがありました。2005年に北海道は、道州制の推進を図るため「道州制推進道民会議」を設置しました。たまたま私がこの会議に参加する機会を得て、いろんな分野の方と議論し、釧路や福祉分野に限らず、今の北海道で起こっている地域のさまざまな深刻な状況を知り、そうした課題意識をもついろいろな人たちと出会ったことで刺激を受けたことがきっかけです。それまでNPO活動を通して感じていたことや

※1 NPO法人地域生活支援ネットワークサロン
「誰もが自分らしく生き生きと暮らせる地域づくり」を目指し2000年に設立。障がい児の親たちのおしゃべりの延長でできたものの、地域のニーズを吸い上げて急速に事業が増殖し、年間予算約5億円、160名以上を雇用する道内最大の事業型NPOとなっている。
〒085-0824 釧路市柏木町2-8
TEL (0154) 44-5527
FAX (0154) 44-5528
<http://n-salon.org/>





親子ランチの子どもたちと遊ぶ、中高生たち

発想と重なる部分が多くあり、分野を超えて地域ベースで考えていくことがこれからの解決に道筋をつけていくように感じたのです。

地域主権は「地域のことは地域で決める」ことを意味します。私はこれまで仕事上たくさん福祉制度を活用してきましたが、ほとんどは国が一律に決めた制度で、対象者を厳格に規定し、サービスを提供する仕組みです。対象者は高齢者福祉、障害者福祉、児童福祉など、縦割りに区切られています。そうした枠組みは必要ではありますが、画一的な制度の枠組みが実際に地域生活で困難を抱え

た人たちを支えるうえで、ときには不都合や理不尽を生じさせる現実を何度も味わってきました。



縦割りの限界

知的障がいをもつ夫婦が仲間と共同生活を始めたので、グループホームという制度で支えようとしたら、3人の子どもたちが「知的障がいをもつ18歳以上の者」ではないので支援の対象外だといわれたり、育てにくさのある幼児に対して、お母さんの気持ちの整理がまだつかない時期に無理やり「障がい」をあてはめないとサービスが受けられなかったり、福祉制度のどの枠にも該当しないために支援を受けることができなかったり、逆に制度の枠に入ってしまうがために選択肢がなくなったり、制度の壁を感じることもたくさんありました。制度があるからこそ継続してサービス提供ができる側面がありながらも、地域の中で一人ひとりを大切にする支援をしようとする制度が大きく立ち回らざることも多くあります。そのなかで、いつも感じてきたことは、「もっと地域の事情や人々の生活に根ざした形の柔軟な制度ができないものか？」ということでした。もっと地域の

生活課題や実態に近い人たちがアイデアを出して、ローカルな制度をつくる仕組みが必要なのではないかと思っていました。



モデル事業の実施からプロジェクトへ

道州制推進道民会議はそうした地域主権について議論するのだろうと思っていたのですが、会議の議論や雰囲気はなかなか地域の暮らしやNPOの現場で感じるような生活者の視点に近づきませんでした。逆に、実際の活動に戻ると地域主権は私たちの生活には身近なテーマでもありませんでした。地域の生活者や生活を支える活動をしている人たちにとって地域主権への必要性は確かにあるのに、会議の一員になりながらも、その両者が遠い存在であることが私は歯がゆかったのです。

そこで、身近な地域に埋もれている「地域主権の芽」の存在を見つけ出して、それらを地域の人たちで共有し、育んでいく取り組みとして「道州制の芽発見事業」を提案しました。その「道州制の芽」のモデル第1号として検討されたのが「コミュニティハウス」でした。釧路



で長くさまざまな分野で福祉活動に関わってきた人たちに声をかけて、市役所の企画課や道庁の人たちも加わりプロジェクトを組織し、コミュニティハウスの概念がつくられていきました。



2つのコンセプト

プロジェクトで確認されたコミュニティハウスのコンセプトは大きく2つです。1つは、「福祉のユニバーサル化」。これは、既存制度によって細分化され分断化されている福祉の対象者の枠を取り払おうという考え方です。既存制度では高齢者は介護保険、障がい者は障害者福祉、児童は児童福祉など対象者によって受けられる制度やサービスが決まっています。それによって地域に該当する福祉サービスがないと支援を受けることができません。北海道の多くの自治体は規模が小さく、一定数の対象者がいないために福祉サービスが成立しないことも多くあるのが実態です。また、対象者が限定されると同質の人たちが集められることとなります。同じような障がいをもった人たちだけ、同じようなお年寄りだけが集まり、地域に一緒にいるはずの多様な人たちとの出会いが少なくなり、不自然

な同質集団の中で生活することになってしまいます。さらに、同一世帯の中に介護の必要な高齢者がいて、精神障がいのある人もいて、子どももいて、生活保護を受けているという場合にも、複数制度がばらばらに存在しているだけで、それらが有機的に包括的に支援することは困難です。

そこで、コミュニティハウスでは対象を限定せずに「コミュニティハウスを必要とする人」としました。つまり、「地域のあらゆる生活課題に寄り添う」ことを一つの枠組みとしたのです。そうすることでそれまで大きな壁となっていた「制度の隙間」がなくなるわけです。

もう一つのコンセプトは「循環型地域福祉の実現」です。これまでの福祉の場では支援を受ける側（利用者）と支援をする側（支援者）が一方的に決められて、福祉を受ける人はいつも助けられるばかりで肩身の狭い思いをしたり、どこか居心地が悪かったり、元気がなくなってしまうたりすることも見られました。コミュニティハウスでは、そこに関わる人たちの誰もが、あるときは助けられ、あるときには助けるといった両方の役割を果たす、つまり「支援が循環する」場の実現を意識したのです。



対話と協働による発想

そして、釧路のいろいろな地域事情や生活課題を考慮して、機能として、①集いの場、②居住の場、③仕事づくりの3つが浮上しました。こうして、地域の集う場を必要とする人たちが集い、暮らすと必要としている人が住み、仕事をしたいと思う人たちが仕事をつくるということができる地域拠点として「コミュニティハウス冬月荘」がプロジェクト発足から半年ほどの検討を経て、2007年9月に実現しました。オープンまでには、プロジェクトメンバーによる中身の濃い話し合いが積み重ねられました。各福祉分野の地域ニーズをよくわかっていて関係者が、それぞれの悩みや課題について共有し合いました。話し合いを重ねるほど、同じような悩みを抱えていたことを実感し、相互の連携や協力で解決できそうなこともたくさんわかっていきました。

そうして、コミュニティハウスの具体的なイメージがどんどんふくらんでいき、「考えているだけではだめだ」「こうした新しい地域福祉拠点の必要性を検証するためには実際にモデル的な実施が不可欠だ」と合意されたのです。その関係



者の強い気持ちにより、07度厚生労働省障害保健推進事業として提案し、採択され、モデル事業としてオープンにこぎつけることができました。



「コミュニティハウスの機能

コミュニティハウスは地域で発案された道具です。道具はいい使い手がいなくては決して機能しません。コミュニティハウスの機能を模式的に表すと図1のようになります。

コミュニティハウスに必要な要素はまずは「恒常的な場所」と「コーディネーター」、つまり拠点と人がまず必要なのです。しかし、これだけではまったく機能しません。そこに必ず必要不可欠なのは地域の具体的なニーズをもちこみ、一緒に考えて、動く地域の人たちの存在です。それは地域の中で必要なことをよく知っている人（「ニーズマスター」）や実際に困っている人、悩みをもっている人（生活当事者）です。

コミュニティハウスが主体的に何かをすることはありません。地域の人たちが主体的に使うための道具だということが最大の特徴です。その意味で、これまでの福祉の制度設計とは異なる発想や仕

図1 コミュニティハウスの機能



組みなのです。



国への提案、そして 全国ネットワークづくりへ

2007年度のモデル実施によって、新しい地域福祉拠点としての有用性が発揮され、検討会議による検証の成果を新しい時代の地域資源として制度化するための取り組みを進めてきました。まずは、08年の秋に道州制特区として北海道オリジナルメニューとしての実現ができるように、次頁のようなガイドラインを提案をしました（図2）。

この提案はすぐに制度に結びつくとはありませんでしたが、09年1月には冬月荘をモデルとして雇用創出の企画事業の例として内閣府より「フレキシブル支援センター」が提案されました。これをきっかけに、高知県では県の取り組みとして「※2 あったかふれあいセンター」が事業化されるなどの波及効果がありました。そうした広がりには単なる波及効果ではなく、実は全国各地で同じような問題意識や動きがあり、それらが合流して表面化してきた時期と重なっているのだと思います。



モデル事業と検討会の中で整理された「コミュニティハウス」とは？

定義：地域におけるあらゆる生活課題に対して生活主体とともに解決の手立てを講じる「地域拠点」であり、恒常的な「場」と常駐の「コーディネーター」を有する地域福祉事業である。

思想・目的：

- ①制度の隙間をつくらない＝地域による地域のためのセーフティネット機能強化
公的援助(福祉、法務など)を必要とする人の予防線が地域福祉の重要目的
- ②各法関係機関との役割分担によって新社会福祉システム構築への手がかりへ
従来型のシステムの限界を解決するツール開発として
- ③地域(自治体、住民)のエンパワーメント推進
生活に最も根ざした分野の実践で地域主権実現のためのモデル的役割

実施のガイドライン(及び評価軸)：

- ①地域による自治的運営のシステムと評価システムをもつ
- ②あらゆる生活課題に必ず何らかの手立てを講じる
- ③直接支援メニューを3つ以上もつ
- ④自治体との連携システムをもつ
- ⑤包括的で循環的な支援視点をもつ
- ⑥人材養成、ネットワークづくり、まちづくり機能をもつ



地域セーフティネットづくり モデルへ

釧路ではコミュニティハウスの機能をベースに分野や対象を問わない地域課題のまちよりから、解決の取り組みへと展開する動きが続いていきます。2010年5月からは地域のきびしい雇用情勢に対して、当事者の発想と参画をいかす取り組みとして「地域起業創造センターまじくる」をオープンさせました。元コンビニだった空き物件を活用し、内閣府の地域社会雇用創造事業を活用して求職中の人たちが集まり、参加型の相互



研修にやってきた市役所のケースワーカーと求職者がともに学ぶ様子。こうした多様な出会いや対話が地域の次の道を創造します

学習や企業への実地研修を通して、就職活動と同時に地域の仕事づくり、仕事起こし、ネットワークづくりをしようという取り組みです。

この発想は面接に来る多くの人たちの姿や声から生まれました。雇用情勢がきびしいなかで、たくさんの可能性をもった人たちが非常に限られたチャンスめぐってハローワークと家を往復して元気をなくしている現実から、少しでもその力をいかにするための機会がつかれないかと思ったことからの事業化でした。

その後、10月からは複数の領域にわ

たって悩み事を抱える人たちに総合的、継続的に寄り添って相談支援を行う※3 パーソナル・サポート・サービスモデル事業もスタートして、「誰でもいつでも安心して相談できる入口」「元気になることができる居場所、学びの機会」「自分に合った仕事や活動につながる出口の創出」の3点セットできびしい雇用情勢を当事者ニーズと参加により、支援体制づくりを進めているところです。さらには、冬月荘の活動や10年6月から北海道の補助事業を活用して家庭機能に困難を抱える若者たちが安心した生活基盤の中で就労を含めた自立を目指すための生活寮(夏月荘)をスタートさせるなど、リアルニーズに応じた柔軟なモデル事業を

※2 あったかふれあいセンター

「中山間地域が多く、少子高齢化、過疎化が著しい高知県が2009年から「高知型福祉」の取り組みの一つとして独自に設置している柔軟な「福祉よろず屋さん」的な事業。現在は各地の事情に応じて多様なサービス提供を行うセンターが40か所あまりに広がっている。

※3 パーソナル・サポート・サービス

(内閣府2010年)「さまざまな社会的排除のリスクに直面している人の自立を個別的、包括的、継続的に寄り添いながらサポートする。全国19か所でのモデル事業の実施と検討委員会によって制度の道を探っている。



図3 地域のセーフティネットづくりモデル事業



連動して生み出しています(図3)。

今、地域にはさまざまな課題があり、人々の生活もきびしさを増しています。それらを解決する道は生活当事者の発想と参画なしにはあり得ないということを釧路の実践は教えてくれました。一部の人間が社会システムについて考えたり決めたりするのではなく、一人ひとりの希望や知恵が生かされる仕組みへの「組み換え」がとても重要になることでしょう。そうした息づかいが伝わってくる釧路にみなさんも遊びに来てください。

日置真世(ひおきまよ)

長女の障がいをつけかけとして、親の会活動から2000年、NPO法人地域生活支援ネットワークサロンを立ち上げ、2008年まで事務局代表として従事。あらゆる生活当事者が活躍できる「たまり場」をつくり続ける。2008年から3年間、実践を理論化すべく研究職を経て、2011年4月からは特定の所属から離れフリーで、「北海道から地域づくりを創造・発信する 場づくり師」として活動中。

公開フォーラム

地域セーフティネットづくりの仕組みをつくる ～地域ならではの政策、仕組みのありかた～

地域ならではの取り組みを先行している千葉、高知の実践者をお招きし、地域セーフティネットづくりのための普遍性と独自性について議論し、今後の展望を探る機会です。

3月17日(土)

13時00分～16時00分(開場12時30分)

【会場】釧路プリンスホテル 2F 「鶴の間」
(釧路市幸町7丁目1)

入場無料 定員200名(先着順)

※お申込は、FAXかメールをお願いします。

締め切り: 3月10日(土)

17日(土)、18日(日)の午前中にフィールドワークがあります(冬月荘やまじくる見学ツアー)。

ゲストスピーカー

窪田 純子 氏 高知県地域福祉部地域福祉政策課地域福祉推進チーム 主幹

朝比奈 ミカ 氏 千葉県中核地域支援センターがじゅまる センター長

司会・進行 日置 真世 氏

【主催・お問い合わせ・申し込み先】

地域パーソナル・サポートセンター えにい
〒085-0835 北海道釧路市浦見4丁目2番3号
TEL: 0154-44-5511 FAX: 0154-44-5512
MAIL: any-946ps@n-salon.org

お知らせ





まじくるん の基礎講座

まじくるための
必須アイテム
「たまり場」を
知ろう！



これから地域で社会の組み換えを考えるときに力ギを握る重要な機能が「たまり場」なんだ。たまり場は「場」ってついているからと言って、〇〇サロンのような単なる場所のことではないよ。じゃあ、「たまり場」って何なんだろう？ ちょっと見てみよう。

1 たまり場にはたまり場であるための条件がある

「たまり場」とは多様な人たちが出会ったり、交流したりする機会、機能、仕かけのこと。だから、子育てサロンやふれあいサロンもその一つの形ではあるよね。でも、サロンだけじゃなく、勉強会やサークルの集まり、会議のような場面もたまり場になりうるんだよね。でも、いろいろな人たちがたくさんいればそれだけで「たまり場」ということにはならないんだ。たまり場がたまり場であるためには、以下の段階的な4つの要素があることがわかってきたよ。

第1要素

多様な人たちが出会う、集まる、交流する

まずは多様性が必要です。同質集団ではなく集まる人たちが多様であることが「たまり場」にとって重要です。年齢、立場、職業、背景、性別、文化や習慣など多様なものももち込まれる機会であること、それが第1の要素です。

さらに多様性を受け入れる文化が必要ですよ。単に多様性があるだけではなく、お互いの違いを認め、主義主張や立場や肩書によって排除や差別が起こらないような多様性の受容があることが条件となります。

第2要素

共有する目標やテーマがある

次に、多様な人たちが集まったとしても、めいめいばらばらの方向を向くのではなく、みんなが同じ方向を向くことができる目標やテーマがあることが2つ目の要素です。その場においては誰もが納得し、否定の余地のない、みんなが同感できる、つまりは戻ることができる拠り所が必要ですよ。

また、それは明確化、可視化していなければなりません。あいまいではなく、シンプルに繰り返し確認され、一貫していることが重要になります。

第3要素

対等な対話と協働が繰り返される

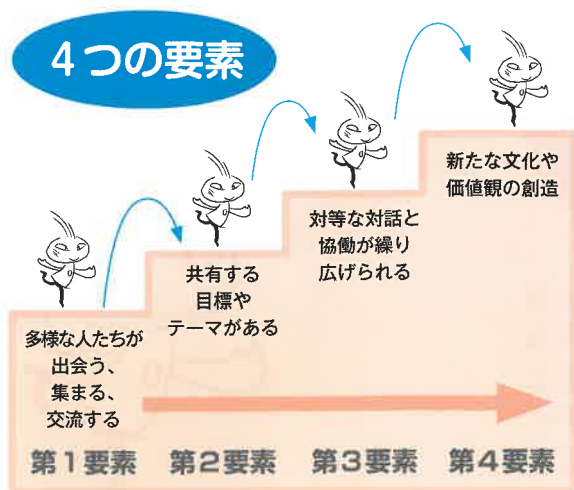
3つ目は「たまり場」には対等な双方向のコミュニケーションがあり、さらにはみんなで協力し合って取り組む実働があること、つまりは「対等な対話と協働の存在」が要素となります。一方的な意思伝達ではなく、参画する人たちの相互の情報や意見の交換、交流があり、どんな人でも声をあげることができ、それを聴いてもらえること。また、その声から何らかの行動が生まれ、それに賛同する人たちとの協働につながる機会が必要です。



新たな文化や価値観の創造

最後に1〜3までの要素を満たしたうえで、今までにない新しい文化や発想、価値観が生じる、つまりは創造的な営みがあることが要素となります。それは、単にその「たまり場」の機会にとどまらず、参画する人たちに創造的な発想や活動が醸成され、それぞれ他のコミュニティにももち帰り、大切にしたり、活用したりすることにつながります。

4つのうち、2つまでの要素までは実は結構、あちこちにあるんだ。よく見かけるのは市町村や都道府県、国などが



呼びかけて行う会議や委員会だよね。自立支援協議会、要保護児童地域対策協議会、子ども若者支援地域協議会などの会議は2番目までの要素が意識されているよね。何も公的な会議ではなくても団体や学会でも多様な立場の人たちがそれぞれのもち味や興味関心、経験や文化的背景をもち込んで、何らかのテーマに基づいて議論をしたり、学習をしたり、事業を行うことはよくあるよね。

でも、そんなチャンスがあまり生かされていないのは、第3の要素の存在なんだ。実は何よりも重要なのは第3要素が仕込まれているかどうか、そこにかかっているんだ。多様な人たちが目的をもつて集まる機会にいかにか「対話と協働」を実現させるか、それが「たまり場」が機能を発揮するためのもっとも重要なカギなんだね。

実際の地域社会ではさまざまな既存の立場や肩書、役割分業が存在し、多くの利害関係があるよね。だからそう簡単にみんなが生きていきとおしゃべりしたり、一緒に何かに取り組んだりするのはできない現状もある。それに、そうした感覚に慣れていないから戸惑ったり、恥ずかしかったり、無意味に思えたりする感覚もあるんだ。だから、意識してそう

した役割を果たす存在が今は必要になっているんだよね（それが、まじくるなんだけど）。

2 たまり場のつくり方はいろいろ

たまり場の成り立ちやスタイルは実に自由で幅広いんだ。どんな形でも4つの要素が意識的に仕込まれていれば大丈夫。だから、活動や事業がたまり場にもなるし、会議の場ももちろんなる。それから、組織そのものがたまり場機能を発揮することもできるんだ。

① 活動や事業をたまり場にする

各セクター（行政、企業、NPO、市民団体、学校、町内会などの組織）が自分たちの事業や活動そのものを「たまり場」として機能させるつくり方。事業の企画、実施の段階で必要要素を意識的に組み込むことにより、手軽に実現できる。既存の事業を少し工夫するだけでもよいし、新規の事業を企画する際に要素を意識することでも実現可能。

例…町内会の行事や障がい児の親の会や子育てサークルなどの身近で気軽に参加しやすいもの、NPOが行



さまざまな事業や企業が行つセミナー、地域的に大規模に行われるお祭りなどまでさまざまな事業や活動、単発的なイベントもあれば、毎日開放している事業でもOK

②既存の会議体、合議体をたまり場にする

すでにある会議や委員会や協議会を活用し、その運営方法を工夫することによって、たまり場機能を発揮するつくり方。特に行政が設置する委員会や協議会は格好の機会。もともとやらなければならない会議を効果的に実施することができ、参画者が単なるお客さんにならずに主体的になり、ネットワーキングも促進されるため、今後の地域でたまり場を広げるうえでは非常に注目されるつくり方。

例：会議、委員会など

③組織をたまり場にする

目的がある程度特化されたり、実行が具体化されたりしたときには新たに組織をつくり、その組織そのものを「たまり場」として運営、機能させる方法。組織的な実行力を伴つこと、多様な構成員の参画によりネットワーキングが図られ維持、発展していくことが特徴。

まじくるレクチャー

例：NPO、任意サークル、ゆるやかなネットワーク組織

3 たまり場機能がスゴいわけ

でも、そんな怪しい「たまり場」がなぜそんなにカギを握るのか疑心暗鬼な人もいるよね。みんなで集まってごちゃごちゃしゃべって、協力して活動することが一体どんな効果があるか、図で説明しよう。

たまり場機能が発揮されるということとは、こんなシステムが循環することを意味するんだ。

たまり場があると、そこに集まったり、出会ったりする人たちが自分の悩みやつぶやき、もやもやとした思いを表現することができる。また、知恵や希望やひらめきも発信することもできる。たまり場があることによって、それまでは一人ひとりが抱えてしまっていた「声」を

図 たまり場があると…



出せる機会を保障するってことなんだ。それは、多様な人たちが相互の存在を承認し、お互いの発信を受容することにもなる。すると、あるとき、誰かがリアルな悩みや困り事をたまり場にもち込む場面が訪れる。それが、一人ひとりの中に隠されていたニーズが「社会化する」瞬間といってもいい。たまり場という機会



が保障されていることで、その一人の声は他の人に認知されて、意識されて、共有化されていくんだ。そのプロセスによって一人の悩みは社会につながっていくんだよ。

この課題の社会化のきっかけをつくってくれる「誰か」っていうのが実はとっても大事なんだ。

事業やネットワーク、制度などなど、社会資源が生み出されるためには、誰かが「困っているんだ」「必要なんだ」とリアルなニーズを表明してくれないとできない。このリアルな声をうまく取り取らないで生み出されてしまったがために、使にくい、使えない、もったいない社会資源も実はあるんだよ。

これからの時代はお金もないし、人材も限られていく。そうすると、知恵を絞ってみんなで本当に使える資源を考えなくちゃならない。そのためには、地域社会には何が本当に必要なかを明らかにすることが何よりも大事なんだ。そして、たまり場でいろいろな人たちがつながっていれば、その誰かの悩みを囲んで考え、解決のために具体的な事業を実現することにつながる。実現化はそうすぐ簡単にはできないかもしれないけど、た

まり場が力を発揮して、さまざまな人や機関との連携がおこり、その連携の中でネットワークもさらに広がる、まさにリアルニーズをめぐるいい循環が起るんだ。

こうなると、どんな人でも活躍の場があることに気づくよね。たまり場につながって、自分の思いや悩みを語ったり、聴いたりする人たちはもちろん大事だよ。そして、「困っているから、誰か助けて」と助けを求める存在もとても大事な役どころだ。そして、そのヘルプ発信を聞いて、うんうんとうなずく人や励ます人も課題が共有化されて社会化していくためには大事な存在だよ。当然、それらを解決するために実行する人も重要な役割だ。今までは地域課題の解決は、この最終段階の「活動をする人たち」だけだと思われていた節があるけど、本当は違うんだ。実はその前の存在があつてこそなんだよ。そこにつながる人たちがいてはじめて新しい社会を創造していくことができる。地域課題を解決するプロセスにおいて、たまり場がすごいのは、どんな人でも社会とつながって、それぞれの役割を果たすことができる仕かけになっているからなんだ。

どう？
少しはわかったかな？
今度、機会があったら
たまり場がうまく
まわるようなコツとか、
うまくまわった例なんかを
話したいなあ。



まじくるん

2009年から始まった「コミュニティハウス普遍化事業」をきっかけにして徐々に姿を現した地域づくりに欠かせない役割としてのキャラクター。分野や地域を問わず、今の社会の課題をいろいろな人たちが主体的に関わり解決するための活動に必要な要素・機能を擬人化している。最初は「地域コーディネーター」、最近では「しょくばいくん」と呼ばれることがあったが、本人が納得せずいたところ、このたび「まじくるん」として落ち着いた。

普段は目立つことは好まないが、ひそかにあちこちに現れて、さまざまな実践の大事な機能を共有化したり、言語化したりする。参考までに、語源になっている「まじくる」は多様なものが主体的に混ざり合う様を表した造語。



図解 多様な担い手によるさまざまな取り組み

社会の課題を意識し、それを解決しようとする取り組みは、たくさんの分野において各地で実践されています。従来の制度の枠を超えて、実際の地域課題に即したそれぞれの実践にはある程度の共通点があることがわかってきました。

そうした多様な実践を図で整理してみたよ！



全体像「入口」～「中間」～「出口」

いろいろな立場の人たちが排除されることなく、安心した生活を送ることができるようには、3つのステージが連続的・包括的に機能することが重要です。

総合的・包括的・
継続的な相談支援
「入口」

安心・回復・気づきと学び・
役割を獲得する場
「中間」

誰もが協働性の中で
能力を発揮して働く
「出口」

多様な分野の専門的な相談窓口が、ばらばらにあればよいのではなく「敷居が低い多様な窓口がたくさんつながっている」ことが地域としての「入口」。

また、単に悩みを聞いてくれるだけではなく一人ひとりの悩みの解決を通じて地域の課題も発見して、地域や社会へも働きかけ、ネットワークや制度をつくるための動機や根拠となる重要な役割もあります。

一人ひとりの状況に応じて人とつながり、活動に参加ができて、自分を語り、表現できる機会であり憲法25条(生存権)から13条(幸福追求権)へとつなぐ多様な「場」。多様な人たちがさまざまなニーズをもちこめるよう、ゆるやかで柔軟な空間、時間の運用が求められます。各分野で中間的なサロン事業が展開されてきましたが、これからは対象を限定しないユニバーサルな視点や「出口」へとつなぐために役割や出番を意識することが重要です。

「正規雇用に対して非正規雇用、フリーター、ニート」などといった両極的なスタイルから、多様なグラデーションの中での働き方があり、多様な人たちがそれぞれの立場や能力や状況に応じて活躍、社会に貢献できる機会があること。

また、雇用というスタイルだけではなく、市民が地域や生活に密着した起業をしていけるような広がりもポイント。

こうした動きは国の一律の仕組みではなく各地で多様な関係者が一緒に対策を考え、実行するような地域ベースのマネジメントがカギになります。



⑤能力開発機能

これまでの座学中心の特定・定型のプログラムによる就労訓練ではなく、個々の状況に応じた柔軟で多様なプログラム提供がポイントです。困難を抱える人たちは教育機会からも排除されることが多いので、教育との連携も重要となります。自分を知ること、振り返ること、受け入れること、そうした自己理解を基盤要素として、たくさんの段階的な機会やていねいなプロセスを活用したきめ細かなプログラムによって、一人ひとりの能力が開発されることが求められます。

7つの機能が
まじくってるって
ことだね！



④雇用創出機能

これから開発される社会サービスはボランティアや一部の実践者の自助努力だけで支えられるのではなく、雇用を創出・拡大していく大きなチャンスです。こうした雇用の場は生きづらさを抱える多様な人たちの居場所や能力開発の機会にもなり、セーフティネットの一つの資源となります。NPO やワーカーズなどの市民による協同的な取り組みだけではなく、企業が新たな視点や福祉的な発想や要素を取り入れたり、コラボしたり多様な可能性があります。

そのためにはある程度、政策的なバックアップや仕かけづくりが欠かせません。雇用政策に「地域ベース」「多分野異分野の融合」の発想が求められています。

取り組みの例

・社会的企業

社会的有用サービスの開発と雇用創出にとってのキーワードが「社会的企業」です。ソーシャルビジネス、コミュニティビジネスという言葉もそれに近い存在ですが、まだはっきりとした定義が整理されておらず、体系化した支援策がないのが現状です。

そうした動きを法律で明文化して推進しているのがイタリアの社会的協同組合と韓国の社会的起業育成法です。いずれも社会的に弱い立場にいる人たちが働く場を得ることができるように、それによって社会的有用サービスが開発されていくことを目的に「社会的企業」を定義し、認定して、さまざまな支援策や優遇措置などの仕組みを設けています。

③社会的有用サービスの開発機能

発見した問題を社会的なサービスに結びつけていく機能。これまでの公的な資金のみで支えられるような福祉的、支援的な定型の福祉サービスでもなく、市場原理に基づいた民間サービスでもなく、その中間的な（いわゆる新しい公共の部分など）多様なサービスの開発と拡大が必要です。

市民、地域ベースに多様な機能や手法を複合的に兼ね備えた柔軟なサービスを開発・維持するためには、それを実行する組織やネットワーク、財源の獲得方法などマネジメント力が問われます。

能 (22頁へ)

頁へ)



取り組みの例

・千葉県の中核地域生活支援センター

千葉県では、対象者を限定しない横断的な施策展開を図る健康福祉千葉方式を推進しています。その一環として、福祉サービスのコーディネート、福祉の総合相談、権利擁護等の機能を併せもち、24時間365日体制で行う「中核地域生活支援センター」を健康福祉センターの所管区域ごとに設置しています。

・内閣府パーソナル・

サポート・センターモデル事業

政府の「支援成長戦略」（2010年6月）の「21の国家戦略プロジェクト」の一つ。

さまざまな領域にわたる問題が複雑に絡んで自分自身の力では必要な支援策にたどり着くことが困難な人に対して、その人の抱える問題の全体像を構造的に把握したうえで、当事者本位の個別的、継続的、包括的な支援を行う仕組みの構築を目指しています。

全国19カ所でモデルプロジェクトを実施中。
<http://ps-service.jp/>

①ニーズキャッチ機能

一人ひとりの困り事から、解決に求められる必要なこと＝「ニーズ」を発見、整理、発信できること。またそこから地域の課題を見出す力。生活困窮状態、行財政のひっ迫状況、経済の状況、福祉サービスなどの社会資源の充実や不測の状況、などの多様な課題、困り事を構造的に把握し、解決のための見とおしがある程度たてられること。

この機能を保障するもっとも有効な取り組みは相談支援事業の充実です。

寄り添いホットライン（32頁）
もこの課題を意識した取り組みなんだね

取り組みの例

・居場所から発展する

『共生型』の動き

これまでの縦割り制度による一方的な福祉サービスのあり方の限界を感じ、「誰もが」「いろいろな人が」一緒にいること、支え合うことを目指した「共生型」の取り組みが広がりを見せています。共生型の考え方を一気に広げたのは、1993年に富山で開設されたデイケアの事業所「このゆびとーまれ」です。お年寄りも子どもも障がい者も大家族のように一緒に支え合いながら生きいきと過ごす様子が注目され、共感を得て、やがて富山型デイサービスとして公式な仕組みの一つとなりました。

その後、こうした動きは熊本県の「地域の縁がわ事業」のように地域の誰もがいつでも気軽に集い、支え合う地域の拠点づくりの普及を図る自治体の地域福祉政策の新たな視点へ発展しています。

②居場所機能

誰もが「いられる場所」「いてもいい場所」という実感を得られる機会が身近にあること。福祉的な通所サービスのように同質集団で一方的に支援を受けるような場とは異なり、「多様性」「対等な関係」「主体的な活動への参加」がポイント。原点は近所のお茶飲み会やピアカウンセリングです。中間的居場所を中心に重要な機能ですが、入口（相談）や職場など（出口）においても必要となります。

これからは単なるいるだけの機能ではなく、多様な「出番」（出口）の機能へとつなげる視点が重要とされます。

「コミュニティハウス冬月荘」（8頁）も居場所機能が重要視されているよね

⑦触

⑥アドボカシ



⑥アドボカシー機能

全体を通してどんな取り組みにおいても重要になる基盤が「アドボカシー機能」です。生きづらさを抱えて困っている人、悩んでいる人たち自身の声から課題を「見える化」し、周囲に浸透させていくものがアドボカシー機能です。一人ひとりが声を出することができる環境、それを聴くことが保障されていること、さらにはそれを発信し形にするプロセスに当事者が参画することができるような環境整備が必要です。

アドボカシーがなかなか難しいんだよね。マスコミは往々にして特別なかわいそうな人たちの実態や悲惨な事実といった取り上げ方をするからね。当事者のリアルな声を発信し、願いを「見える化」するためのツールが必要だね。この雑誌もそのためにつくってみたいんだけどね

⑦いろいろな機能をつなぐ、混ぜる媒介機能

縦割りの専門分化された社会の仕組みを組み替えるためには、異なるものをつなぎ合わせて力を発揮するような「媒介」の役割が必要になります。たとえば入口、中間、出口も、単に相談だけ、居場所だけ、就労だけというように専門特化するのではなく、それらの役割をうまくつないだり、連動させたりする視点も重要です。また、他の6つの機能を組み合わせた事業を地域の事情に応じて展開することができるのも、この媒介機能が発揮されてこそです。

高知県の「あったかふれあいセンター」(13頁囲み)はこうした媒介機能を意識した地域ならではの取り組みといえますし、8頁から紹介した釧路の取り組みもこの機能がうまく発揮されている例といえます。

実は、ぼくは「媒介的キャラ」なんだよ。これからはハイブリッドな仕組みをどうやって組み立てていくかがとても大事だね。ハイブリッドはぼくの得意分野だよ

これから注目の視点は
この2つだね



理論化、実証などの応援

地域での各分野の実践を支え、推進する大事な応援団が研究者です。社会的包摂の取り組みはとにかく幅広く包括的なので、さまざまな角度からの検証が必要となります。社会学、経済学、政治学、教育学、哲学、社会福祉学、心理学、医学などなどそれぞれの研究の専門的な知見からスポット的に縦に深く掘り下げていくことが前提で分野によって学会が組織化されています。そのため、ハイブリッドな取り組みを総合的に理論化するような機会がありませんでした。

これからは、多様な分野の専門家や研究者が連携・協働して研究していくことが必要です。そして、その研究プロセスに実践者や当事者が参画するような機会が広がることも大切な視点です。

研究分野も、研究する人もまじくるってことだね。いろんなものがごちゃまぜになっていく感じはいいねえ。何か化学反応が起きそうだ



生活支援の整備も連動して

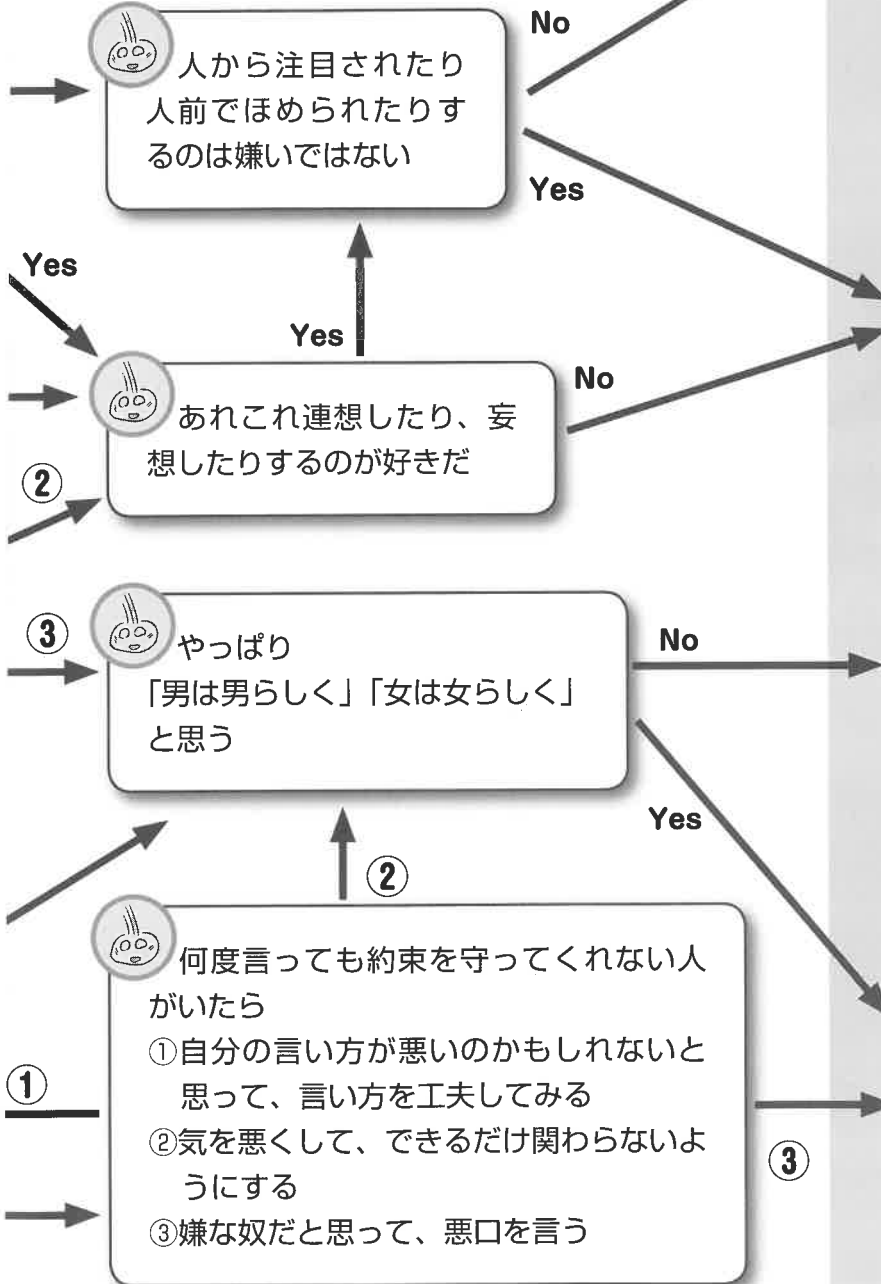
入口から出口までのセーフティネットの仕組みがしっかりと機能するためにはもう一つ大事なことがあります。それは生活支援の体制です。これまで、これらを支えてきたのが「家庭」の存在ですが、家庭のあり方が多様化し、家庭を支えてきた地域や企業や行政も苦しいなかでそれを補完する生活支援体制が必要になっています。

日常的に暮らす場所、食べる物、手伝ってくれる人、お金など、安心・安全な日常生活を保障するサービスは、対象者別、分野別になっているため、状態像によって支援体制にばらつきや不都合が生じています。社会的有用サービスの開発と雇用創出の両機能によって生活支援体制が整備されて、全体の仕組みに好循環が生まれます。

「多機能なハイブリッド構造」これを実現するための法制度や仕組みづくりがこれからはカギだね



「まじくるん」は違うものをごちゃまぜにして
化学反応を起こす触媒なんだ。
君の触媒度を楽しくチェックしてみてね。
触媒度の高い人も、そうじゃない人も
いるのが当たり前だしおもしろい。
みんなでまじくろう！



まじくるん仲間

未知の世界も大変そうなことも
わくわく楽しめてしまう「逃げ
たがり気質」の君はまじくるん
の仲間かも！

まじくるんを探せ

やりたいことがそれなりにあつたり、先を見ながら着実に進む君は近くにまじくるんがいてもっと可能性が広がるかも。

まじくるのススメ

少し控え目で何事も一歩引いた目で見ってしまう君は一歩踏み込んで「なぜ？」と考えてみよう。視野が広がるかもよ。

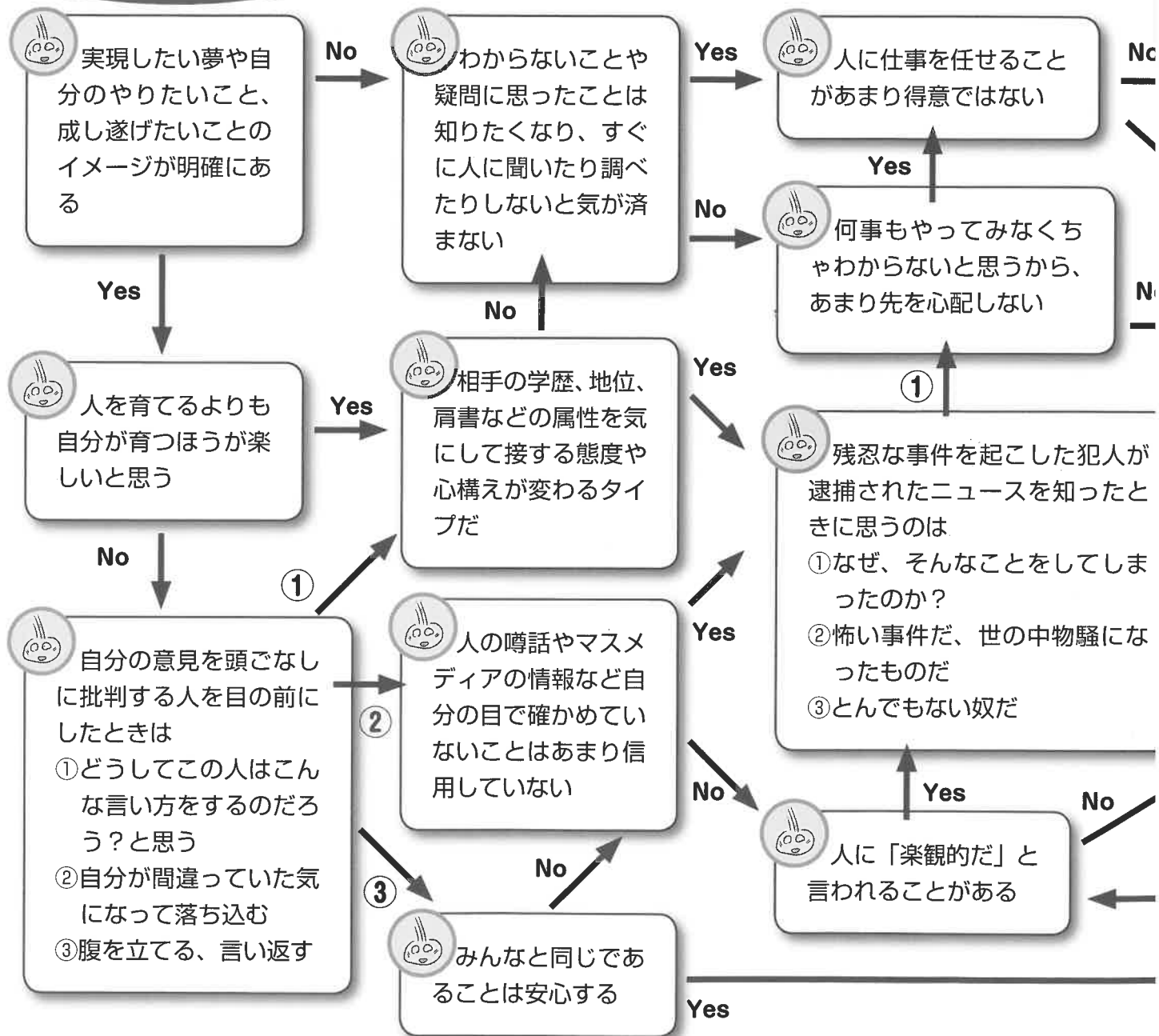
まじくらなあかん

つい「こうあるべき」と考えてしまいがちな君はいろんな人とまじくってみよう。新しい発見があるかもよ。



まじくるんの まじくるタイプチェック

スタート!

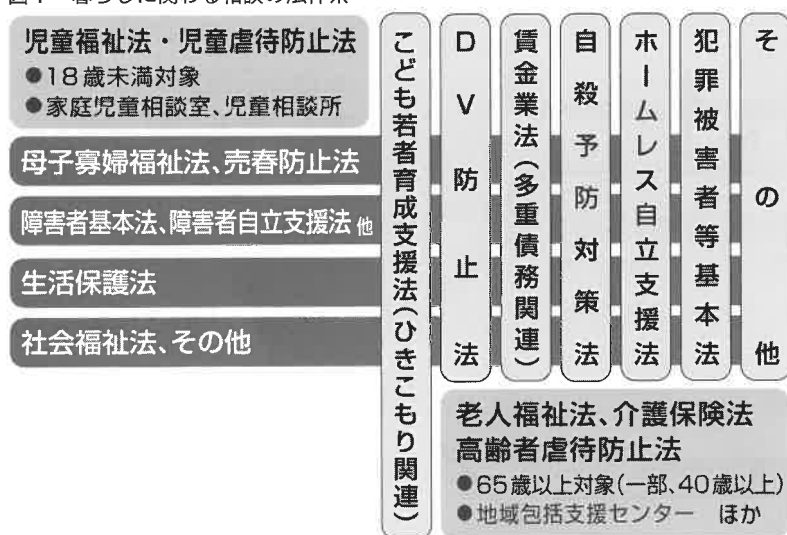


「何でも」 を検証する①

さまざまな生活の困難を包括的に支援をする場合には「何でも相談にのる」ということが必要になります。これまで、制度や専門分野は細かく分かれてきた経過があるので、「何でも」を対象とすることは「難しいのではないか?」「専門性の確保はどうなるの?」と心配の声もあります。一方では、相談をする側からすると、対象を限定しないで、何でも受けてくれるワンストップの窓口があるほうが便利です、安心だという声もあります。

千葉県はいち早く、総合的、包括的なよろずの生活相談支援を24時間365日行う「中核地域生活支援センター」を2003年に設置しています。中核地域生活支援センター「がじゅまる」センター長の朝比奈さんに「何でも相談」について解説していただきます。

図1 暮らしに関わる相談の法体系



1 「どんな相談も受ける事業」とは何か
生活に困難が生じて解決策を探したいとき、公的な福祉制度等を申請する必要があるとき、私たちにはさまざまな法律とそれにもとづく相談窓口が用意されています(図1)。

私たちの国の社会保障制度は、歴史的に「対象」別につくられてきました。年齢別に18歳未満の「児童」、65歳以上の「高齢者」という定義があり、その間の年齢

の人たちは母子家庭や障害者、生活困窮者という定義にあてはまれば何らかの制度や相談の仕組みを活用できます。

しかし、社会構造や環境の変化のなかでそれだけではカバーできない課題が現れた結果、D・V防止法やホームレス支援法などの対策法がつくれ、それにとりもなつて各種事業や相談窓口も整えられてきました。

困り事が生じたら、まずは自分がどの定義にあてはまるのか(対象別)、どこにもあてはまらなければ困り事がどの法律にあてはまるのか(課題別)、それにより活用できる窓口が決まってくるのです。

ですから、「どんな相談も受けます」といっても、仕組みがあるのであれば、その仕組みを活用することが本来です。機能すべき仕組みを機能させることは、地域全体の底上げになります。

しかし、つながるべき相談ニーズがつかない場合も多くあります。制度が複雑になればなるほど一般市民には理解が難しく、また窓口が増えれば役割分担を重視する行政組織では「そのことでしたらあちらに行ってください」という対応になります。たくさんさんの複雑な問題を抱えた人はただでさえ疲れた心と身体を抱えて右往左往したすえに、相談することをあきらめてしまうことすらあります。

さらに、制度が進歩するスピードをは



るかに超えて社会は変化を続けており、対応すべき新しい課題は他にも多く存在しています。制度が対応できていない新しい課題を抱えた人たちは、どこにも相談できず、問題を深刻化させているであろうことはたやすく想像できます。

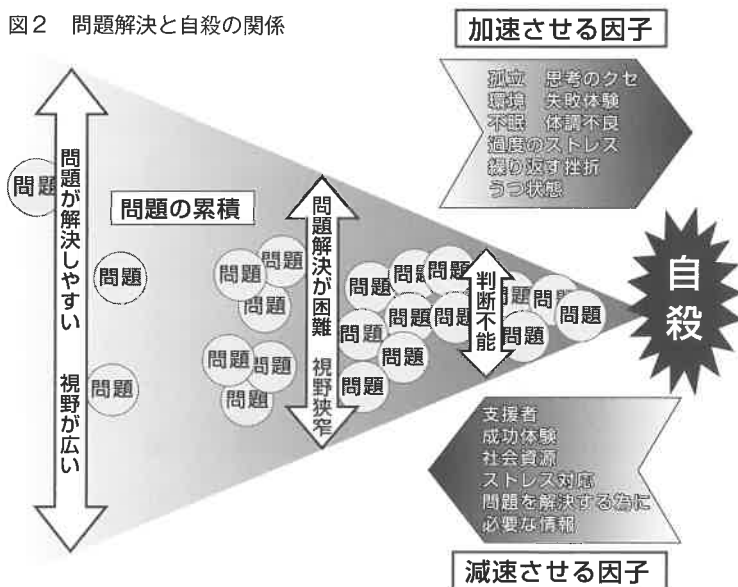
「どんな相談も受ける」事業に関わる際には、こうした状況をよく理解したうえで相談に臨むことが重要です。

2. 解決困難な問題が複合していくと、どうなるか

私たちが相談者に向き合ううえで、生活困難と人の心理がどのような関係にあるのか、生活困難が人をどのような状態に追い込んでいくのかを考えてみましょう。

2011（H23）年3月に千葉県市川市が策定した『市川市自殺対策計画』は、「問題解決と自殺の関係」を図2のように示しています。左側は普通に日常生活を送っているときの状態です。視野がある程度広く保たれ、発生する問題に一つひとつ解決していくことは比較的簡単にできます。しかし、問題が累積すると視野が狭くなり、それにつれて問題解決のスピードが遅くなったり解決できなくなったりして、さらに問題が累積していきます。孤立、環境、

図2 問題解決と自殺の関係



（出典：「市川市自殺対策計画」）

そもそもその人がもっている思考のクセ、過去の失敗体験、体調不良、不眠、過度のストレス、挫折体験の繰り返し、うつ状態などの加速因子が重なると、さらに視野は狭窄し問題は累積します。最終的には判断不能の状態に陥り、不健康な自己決定の究極的な形ともいえる自殺に追い込まれてしまいます。

同計画では、こうした自殺に向かうベクトルを減速させる因子として、支援者、成功体験、社会資源、ストレス対処、問題を解決するために必要な情報をあげ

3. 健康な「自己決定」に必要なこと

ストレスに対処する力を身につけ、支援者や社会資源を活用しながら成功体験を重ねて自殺を防ぐということは、別の言い方をすれば、他者との関係性の中でブレーキをかけるということです。

「生活困難」と「その人の視野の広さ・狭さ」は相互に関係していると思われるますが、いずれにせよ、他者とながら日常生活の中で豊かな関係を築いていくことが、生活困難を未然に防ぐ力になることは間違いありません。



しているか、現場での支援の中から考えてみたのが表1の項目です。

人は日常生活の中で多かれ少なかれこうした作業を行い、その積み重ねによって健康な「自己決定」を成立させています。これらの作業の過程には多くの場合、家族や友だち、学校の教員や職場の人など身近な人が関わっています。他の人の意見を参考にし、他の人にならう、真似をする、他の人に言われてその気になるなど。決めるときは案外にそんなものです。身近に関わる人が多ければ多いほど、取り巻く価値観は多様となり、提示される選択肢の幅も広がります。助言が直接の役に立たなくても誰かに話す行為だけで展望が開けるという経験は、誰にもあるでしょう。

しかし、生活困難の渦中にある人は、表1に示したようなプロセスを自分一人で抱え込んでしまいうまく作業をこなすことができず、生活困難の状態をますます悪化させていると考えられます。

表1 健康な自己決定のプロセス

率直に話す。偏りなく聴いて理解する
見通しをたてる。段取りを組む
優先順位を決める
実行に移す。最後までやり遂げる
適切に振り返り、記憶に残しておく。経験化する

談を受けて一定の問題解決につなげることができたとしても、それは相談者の人生の一局面にしかすぎません。相談者の孤立は依然として変わらず、偏った思考や突飛な判断を繰り返していくのだとすれば、相談者が新たな生活困難を抱えてしまうことは明らかです。

では私たち支援者は、何を目指すべきなのでしょう。

4. 問題解決のプロセスを支援する

相談に来る人は、自分の問題がどうしたら解決できるのか、助言を得たいと思っています。相談者がほしいと思っている助言が得られれば、相談は成立しているように思われがちです。

しかし、相談者がその助言を適切に活用して自ら問題解決に取り組む力があるのか、取り組める状況にあるのか、支援者はそのことを見きわめることが重要です。そのためには、相談者のおかれた状況やコミュニケーションの能力、これまでの自己決定のプロセスを把握する必要があります（アセスメント）。それらを無視して支援者が助言をしても、解決の力にはなり得ません。助言の内容が消極的、否定的なものであると、生活困難な状況の中で無力感を抱えた相談者は、そうした助言によって自分自身が否定されたような気分になり、他者に相談する意

欲を失ってしまうことすらあるのです。

問題を解決する主体は相談者自身であり、支援者は相談者が取り組む問題解決と一緒に考えたり悩んだりしながらそのプロセスをサポートする存在にすぎません。相談者が自らの問題を何とかしたいと考え、「困っている」ことを他者に訴えるという行為が、何よりも重要な支援の出発点です。

なかには、問題を抱えた本人以外の周囲の人から相談がもち込まれることがあります。それが身近な家族であったりすると、家族が困っているほどには本人は困っていないかったり、家族が先回りして困りそうなことに対処してしまうので本人が困る事態にならないということもあります。その場合には、相談をもち込んだ家族と一緒にご本人の立場に立って状況を整理しながら、ご本人が困って相談したいというきっかけを検討することが必要です。また、全体状況を把握すると、本人が困るポイントと周囲のそれとにズレがある場合があります。緊急度の判断は当然に必要となりますが、ある程度時間的な余裕がある場合には、ご本人が困っていることから支援していくという進め方が有効です。

重要なのは、ご本人は、困窮や孤立、抑圧、過度のストレスなどの中で、そもそももっていた（または身についていた



はずの)力を奪われた状態にあるとらえることであり、支援の目標は、健康な自己決定のプロセスを獲得し、自分で社会資源を活用しながら問題に対処できるようにすること(エンパワメント)なのです。

問題解決のプロセスに臨む際に、いきなり大きな課題に取り組もうとしてもなかなか事態は打開できません。ただでさえ自信を失っている相談者が「やっぱりダメか」と思うことは、問題解決の意欲を減じることになります。すぐに解決できそうなことを見つけ(スモール・ステップ)、その解決プロセスを通じて、一緒に考える、動く支援者がいることを伝えるとともに、できたことを一緒に喜んで相談者の自信の回復につなげるという考え方が重要です。一方で、可能性が低いかれど試みたいと相談者が考えた場合に、そのプロセスにつき合う支援者が得られることで「一人ではない」と実感が得られることもあります。行政の窓口に同行支援をして対象にならないと断られる説明を本人と一緒に聞き、そのことを振り返りながら次の手立てと一緒に考えるというプロセスも、ときに有効です。

また、アセスメントを進めるうえで、相談者から話を聞いて把握できることは一部に過ぎないと認識しておくことも重要です。「部屋が散らかっている」「お金

がない」「暴力をふるわれている」「眠れない」などの訴えは、いずれも相談者の主観にもとづいた表現です。相談者と信頼関係をつくりながら、買い物や通院への同行、家事の手伝いなどの直接的な生活支援を行い、相談者の生活場面に関わることで、より具体的な事実の把握が可能になります。面接では把握できなかった本人や家族の具体的な生活の状況や生活スキル、身近な人たちとの関わり方などを支援者が実際に見聞きすることで、アセスメントが肉づけされていきます。心身の変調で病院の受診が必要になる際も、公的な福祉施策につなぐ必要が生じたときも、こうした具体的な情報があることで円滑で適切な連携が進みます。

相談者があちこちに相談したがうまくいかなかったと訴えた場合には、相談者がどのような伝え方をし、相手がどのように対応したのかを確認することで、コミュニケーションのギャップが明らかになることがあります。なかばクレーム扱いをされてしまっている相談者に同行支援をすると、不信感がいかにコミュニケーションを歪めてしまうのが実感されます。しかし一方で、本人をよく知る信頼関係のある支援者がコミュニケーションの仲介をすることで、誤解を減らしたり、相談者本人にも関係機関の側にも「そうやって伝えればよいのか」とい

う理解を促すことになり、同行支援がなくても必要なやり取りが成立するようになることもあります。

このようなプロセスの中で相談者がエンパワメントされていくことが、支援の重要な目標の一つです。

5. 「つながる」ことを支援する

もう一つの支援の目標は、相談者が周囲と「つながる」ことを促進し、孤立した状態を改善していくことです。

相談者が孤立するに至った背景には、さまざまな状況が想定されます。暴力をふるう加害者は、被害者を自らの支配下におくために被害者を孤立させます(この点を取ってみても、孤立がその人の力を弱くすることを表しています)。また、暴力から逃げる場合には加害者の追跡を防ぐために、これまでの関係を断つ必要が生じます。本人の意思とは関係なく孤立を余儀なくされる状況が起きていることにも理解が必要です。また、障害や病気によるコミュニケーション能力の十分さ、長期入院や施設への入所など保護的な環境におかれていたことによる経験の少なさ、学ぶ機会がなかったことによる未熟さ、長く抑圧的な状況におかれていたことによる自尊心の低さ、育った国や地域、環境による文化の違いなど、相談者が他者と「つながる」ことを妨げて



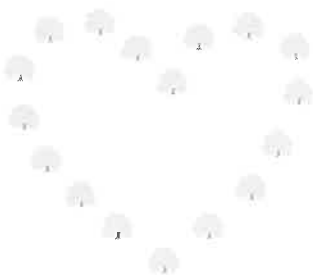
きた要因はさまざまです。

そうした状況をふまえ、支援者は地域の社会資源を活用しながら、相談者が社会に参加して誰か（何か）と「つながる」ことを支援していく必要があります。その際には表2に示したような点を考慮しておく必要があります。こうした点が抜け落ちてしまうと、相談者は参加することができなかつたり、参加したとしても疎外感を味わって参加の意欲を失ってしまいます。

「つながる」ことを支援するために、

表2 参加を支援するために考慮が必要なこと

お金がない	参加費や交通費が払えない、余裕がない 等
時間がない	参加できない、精神的な余裕がない 等
具体的な配慮がない	段差等があって会場に行けない、輪に入れない等
知らない、情報がない	そういう場（人）がある（いる）ことを知らない、自分で判断するしかない等
安心できる居場所がない	自分を大切にできない、他者を尊重できない 等



同行支援は有効な手段の一つです。相談者のコミュニケーション特性を理解し、信頼関係を築いた支援者は、相談者にとって社会とつながる「窓」の役割をもっています。一方で、支援者同士つながる力を得た相談者は、他者ともつながれるはずで、支援者には自らの役割を自覚し、相談者の力を信頼して「つながる」ことを促進していくことが求められます。

6. まとめにかえて

産業構造が変化し、第三次産業が主流となるなかで、コミュニケーションに課題を抱える人たちは仕事だけでなく居場所も失っています。地域社会のつながりが希薄となり匿名性が支配的になって、个性的であることはむしろ排除の対象にすらなっているようです。

排除は、社会から問題を見えなくする、問題を存在しないことにする有効な装置です。相談は、排除のない社会をつくるうえでの「入り口」ともいえます。入り口の段階で排除が起らないように、支援者は常に自らを振り返るとともに、支援者自らがコミュニケーションの力を高め、さまざまな分野や立場の人たちと相互につながり合いながら意識を磨いておく必要があることを心にとめておきましょう。



朝比奈ミカ

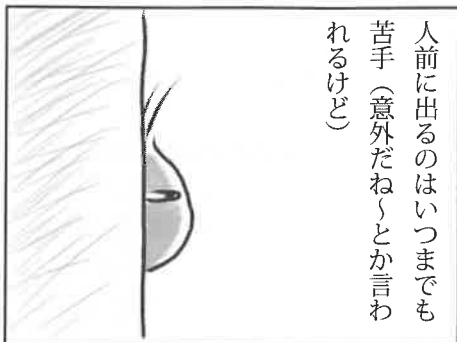
大学の文学部で古代史を学び、卒論のテーマは『古代の障害者』。口頭試問では何のコメントももらえず、「引き続きがんばってください」と言われて卒業しました。八法改正が議論された頃に東京都社会福祉協議会に就職。阪神・淡路大震災、介護保険、基礎構造改革等々、福祉の激動の時代にさまざまな人と出会って仕事をし、具体的な支援の現場にもぐりたいと考えた頃に、出身の千葉県が何だかおもしろそうな状況になっていて、「がじゅまる」の仕事をするようになりました。いかにもなベタな感じの支援を重ねて早7年。立場や分野を超えた「共感」が仕事のエネルギーになっています。





まじくるんが行く

「逃げたがり」は人を育てる？



人前に出るのはいつまでも
苦手（意外だね〜とか言わ
れるけど）



いつも、「誰かが代わりに
してくれないか」画策して
いる。



そして、なすりつける。
（むちゃぶりという文字はない。
当たり前だし）



結果として誰もが活躍し
ちゃったりして（苦笑）

ぼく「まじくるん」



まじくるんは、
これからの時代の期待の星。



でも、自分では輝かない。



あちこちで、化学反応を起
こして、誰かを輝かせたり
する。



まじくるんは密かにあち
こちにいるから、みんな
も見つけてね。

まじくるんは、自らが中心となって何かを進めていくことを好みません。人前で話をしたり、一時的に中心に立つこともよくありますが、そういったことは気持ち的にはとても苦手です。すきあらば誰かに代わってもらおう、自分が逃れたいばかりに誰かにまかせるときには「できる！ 大丈夫！」と根拠なき自信と確信をもって人に委ねるため、委ねられた人は予想以上の力を発揮することがよくあります。外からは「人材育成が得意」などと評されることがありますが、それは誤解です。単に自分がやらないうための策が結果として功を奏しているにすぎません。

まじくるんは、特定の人や職業を指すのではなく、これからの地域づくりを担う人材の大事な要素です。まじくるんは組織を統率したり、人を引っ張ったりするいわゆる旗振り役ではなく、かといってトップのブレインや参謀的な存在でもありません。誰かの応援をして、誰かを生きいきとさせて活躍の機会を創り出す存在なのです。自分が楽しそうなことをやっている、自然と周囲の人たちが表現し始めたり、動きだしたり、何かしらの変化を起こすといった不思議な存在なのです。





寄り添い ホットライン

厚生労働省は今年度、大規模な社会実験事業ともいえる「社会的包摂ワンストップ相談支援事業」の実施を決めました。この電話相談事業は被災地・被災者を中心として、24時間フリーダイヤルであらゆる生活困難に耳を傾けるとともに、その実態を把握し、地域支援へつなげるだけではなく、全国の支援のネットワーク体制を構築することも事業の柱になっていることが大きな特徴です。

こうした国のモデル事業に先駆けて、一般社団法人社会的包摂サポートセンターが10月11日から被災三県（岩手県、宮城県、福島県）を対象とした何でも相談電話「寄り添いホットライン」をスタートさせました。その後、埼玉県でも12月に36時間のモデル実施に踏み切りました。こうした動きの中で、3月にはいよいよ本格的に「寄り添いホットライン」がスタートします。

被災三県対象のパイロット事業

一般社団法人社会的包摂サポートセンターは、被災地の市民の誰もがどんな悩みでも気軽にアクセスできるフリーダイヤルのホットラインを立ち上げようと、代表理事の熊坂義裕さん（医師 前宮古市長・33頁にコメント）をはじめとして被災した地方自治体の首長や首長経験者等が発起人となり、全国の民間の支援団体の協力を得て10月7日に発足しました。

発足の背景にはさまざまな分野で活動する支援実践者同士の出会いや連携がありました。事務局長として実務を中心に担うのは、全国女性シェルターネットワークの事務局長の遠藤智子さんです。

DVや性暴力被害当事者支援の活動に携わり、2011年2月8日～3月27日までに内閣府事業の性暴力DV被害の24時間対応のホットライン「パープルダイヤル」にシェルターネットとして全面的に協力しました。約1か月半の開設で、6万件以上のコールがあり、そのうち2万3460件が電話対応されました。その反響の多さの背景には、誰でもいつでもアクセスし、相談ができるホットラインの必要性がうかがわれます。また、このパープルダイヤルは全国各地の支援

者が連携し、単に相談を受けるだけではなく、相談の内容によってはすぐに支援に駆けつける「同行支援」や来所相談も対応するなど、全国の女性支援ネットワークの連携で当事者を支援者につなぎました。

一方で、支援が必要な人たちの中には少なからず複数の問題を抱える人たちがいて、実際の支援の場面で別の分野の支援者と連携することの必要性も見えてきました。その連携支援の中では、たくさんの方の共有することがあり、さまざまな社会の課題が実は根底ではつながっているのではないかと感じるようになり、異分野との連携の重要性も増していきました。そのような背景から、社会的排除にいたる人たちのトータルな悩みをいつでも受け付ける「寄り添いホットライン」の実現へとつながりました。

第一弾 被災地対象のパイロット事業

社会的包摂サポートセンターは、まず仙台市内に電話相談室を設置し、1回線引いて、10月11日から被災三県を対象としたパイロット事業をスタートさせました。最初の6日間（10月11日午後1時～16日午後10時）は24時間対応で相談を





日常診療の中でも被災地で心の問題の深刻さを痛感しています。社会のひずみが今、被災地に顕著に表れているのではないかと思います。自治体だけではできない、きめ細かな支援を新しい公共という形で実現し、悲劇を食い止め、復興にも少しでも貢献したいと思います。

受け、その後は毎週木曜日と土曜日の週2回10時～22時までで継続的に実施しています。これまでに約300件の相談が寄せられ、その内容は多岐にわたります。目立つのはいろいろな背景から来る心の悩みです。開設当初には福島の方からやり場のない原発への怒りや、沿岸地域の仮設住宅からのさみしさ、つらさの訴え、借上げ住宅で物資が行き届いていないという切実な悩みも寄せられました。

また、木曜日土曜日の実施のため、12月31日大みそかにも相談を受けましたが、ふだんよりも多くの電話が寄せられました。1回線の設置のため、多くの電話がかかってきても対応ができず、つながる比率が20%あまりとなり、公共機関が休みである非常時のニーズの高さがうかがえました。

電話を受けているのは仙台市内でさまざまな相談支援や援助業務に携わる多職種の方たちで、交代でシフトを組んで対応にあたっています。最初の6日間の24時間対応の際には、全国から支援者が応援にかけつけ、交流を深めました。特に夜間の時間帯にはそれぞれの地域の実践の状況や自分自身の経験談を含めて、深い議論に及び、それぞれの現場に戻ってからの励みや勇気につながりました。分野の違う実践者が向かい合って、協力し合って事業を担うことの手応えや相互の学びの多さを改めて実感する貴重な機会となったのです。

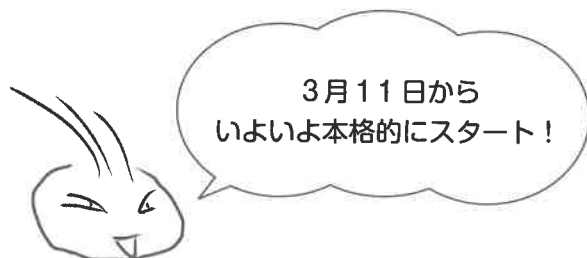
仰天のコール数

埼玉パイロット事業

埼玉県では、そうした仙台区の事業の影響と、埼玉県にはたくさん被災者が避難して来ているという状況があったため、反貧困ネットワーク埼玉、震災支援ネットワーク埼玉の2つの市民団体の有志たちで組織した「寄り添いホットライン埼玉設立準備会」を立ち上げ、首都圏を対象に12月17日10時～18日22時まで36時間で4回線のパイロット事業を実施しました。事前に主要な新聞が紹介してくれたことや駅前でのビラ配り、また実施

当日にNHKがニュースで取り上げたこともあり、何と36時間で2万1444回のコールがありました。そのうち実際に、電話がつながり対応できたのは270件と、総コール数のわずか1.3%にしか対応することができなかったという状況になりました。

数もさることながら、印象的だったのは「被災者ではないのですが…相談してもいいでしょうか」という方がいるなど、誰もが相談できるところがあることへの期待の表れでした。電話対応には弁護士、司法書士、福祉・就労関係の支援



者(社会福祉士、精神保健福祉士を含む)、教育関係者、医療関係者、当事者などの約40人がシフトを組みながら、対応しました。

ひっきりなしにかかってくる電話に驚きながら、相互の専門情報を交換し、サポートしながらの36時間でした。中心メンバーの中にはぶつとおしで関わった人たちもいて、終わった後には風邪をひいてダウンするほど、緊張感と高い集中力をフル回転させる事業となった様子です。それでも、後日の反省会ではある司法書士から「人の悩みというのは結局、何でも『心の悩み』なんです。普段は法律的なことを切り取って見がちだったけれど、心に寄り添わないと支援はできないことがわかりました」という感想が寄せられるなど、とても貴重な経験ができたという共有がなされました。

学生の活躍

仙台のパイロット事業では、相談を受けるプログラムと同時並行で地域の社会的包摂への取り組みを理解し、推進する担い手として、地域の潜在的な人材を育てるプランを立てました。電話相談を受ける事務所がちょうど東北福祉大学の近くだったこともあり、福祉を学ぶ学生の

存在に注目しました。当初は少しでも電話相談に興味をもって手伝ってくれる学生さんがいれば戦力になるかもしれないという思いでした。準備期間も短いなかで、まずは大学を通して呼びかけをしたところ、約70人の学生たちが興味を示してくれました。これからはじめて取り組みという事業の不透明で流動的な状況を含めて説明や面談をした結果、40人が「何らかの形で手伝いたい」と登録してくれたのです。予想外の反応にびっくりしましたが、活動の説明会や面談や研修を進めていくなかで、それぞれの動機や思いにふれることになりました。

動機の多くは、「被災者への支援に何か関わりたい」というものでした。1年生以外のほとんどは震災当時に大学の近くにいて、身近に震災を体験しました。また、大きな被害を受けた地域出身である学生も少なくありません。実家が大熊町で原発の煙突が見えるところで育った大学院生は、家族が避難生活をしているので、他人事ではないと話しました。石巻市出身の学生は津波の被害にあった実家と連絡が途絶えたまま、着の身着のままガソリンスタンドなどで夜を明かしながら、歩いて3日ほどかけて実家にたどり着いた経験を話してくれました。車い

すの学生は被災地のボランティアは力仕事がほとんどで参加する機会がなく、自分にもできることはないか探していたと言いました。

そして、もう一つは「相談の現場に関われること」への関心の高さがありませんでした。介護や支援などの直接援助の機会はまだいけれど、相談事業にふれる機会はめったになく、卒業後に人を支えるいろいろな仕事を指すうえでもいい勉強になりそうだという思いがあったようです。

学生たちには「社会資源リスト」の作成をしてもらいました。あらゆる相談を受けるこのホットラインはさまざまに寄せられる相談に応じて、相談者の身近なところの専門機関や支援機関の情報提供をしたり、つないだりします。そのつなぐ先の情報の整理とリサーチとデータ化をお願いしたのです。この活動は4年生が中心となり数人のグループで代わることがわる空き時間に来て進めてもらいました。また、週に2回の電話相談の場面のサポート活動では、実際に相談を受けるさまざまな分野の社会人の相談員さんから直接学ぶ機会を交代で体験しています。



参加した大学生たちの声

時間もお金も体制も整わない手探りの活動でしたが、12月を中心に進めてくれた学生を訪ねて話を聞きました。

菅原さんと北島さん2人に誘われました。今までやりたいって思っても大変そうとかで引いちゃうときがあったのですが、今回はせっかく紹介、教えてもらったし、そんなつながりを大事にしたかったので。

いろいろな相談員さんを見て、自分が相談員になったときに、「自分なりの相談業務でいいんだ、自分の中で確立できればいいのかな」とは感じ、今のうちにいろんなよいものを吸収しています。



佐藤雅俊さん
(4年生)

人の心に寄り添えるワーカーになりたいと思っていて、テーマの「寄り添い」にひかれました。対面よりも電話相談なんて見えないからこそ難しいっていうのがあるので、逆に学生のうちに力を付けるのすごくいい機会になるなって思って参加しました。

この活動を通して、教科書で出てきた「ソーシャルインクルージョン=社会的包摂」だっということがわかりました。なるほど、これが「社会的包摂なんだ」って実感がもてました。



北島明日佳さん
(4年生)

将来ソーシャルワーカーとして働きたい。電話相談に関わることによって自分も人の話を聴いてつなげるみたいなことをできるようになれたらな、学びたいなと思って参加しました。いろいろな相談員さんの対応が勉強になります。電話を切ったあとに質問をして教えてもらっています。他の相談員さんの対応に対して嫌な感じじゃない伝え方でアドバイスできる人を見るとすごいって思います。でも、DVの相談にふれて結婚するのがちょっと怖くなりました(笑)。



菅原志帆さん
(4年生)

4月から介護職として働きます。その先に精神保健福祉士を目指していく過程として、電話相談を通していろんな悩みとかを聞けたらいいなと思って始めました。

電話越しに相手の感情をどう受け取っていくか、逆にどう表現していくかっていうのもそれぞれ違っていくので、日々勉強です。学ぶとこいっぱいです。



高橋亨枝さん
(4年生)

卒業後に自治体職員として働きたいと思っているので、活動の幅の広さに共感しました。地域にどのような社会資源があるかというところを幅広く調べるそのことは自分の将来に強く結びつくのではないかと思います。あとは、非常に社会の動きに対してより敏感になるなと思っています。

リサーチの電話のやりとりの際には、寄り添いホットラインのチラシ送付を申し出て、地域の関係機関に積極的にPRをしています。



井澤勇揮さん
(3年生)

春からは看護師を目指して進学します。医療に行ってしまうとなかなか地域のことを知る機会が減ってしまうと思うので、今の大学生のうちにもっと地域に暮らしている方たちにふれる機会をたくさんもって視野を広げられたらいいなと思って始めました。この電話相談に入っていると本当に近くでいろんな相談員の方の対応とか相談してくる方の悩みとか、生の声を聞けてすごくいい機会に出会えたなって思います。



弓田春菜さん
(4年生)



座談会の様子

か電話をかけられない学生さん
もいたり、作業内容の引き継ぎ
がうまくいかなかったり、苦労
しながら何とか仕上げることが
できました。

中心で活動している4年生は
国家試験が控えていたため、こ
れまでのノウハウを3年生に引
き継ぎました。春からはそれぞ
れの道に歩むこととなります
が、いろいろな意味で貴重な経
験になったようです。同時に、
学生たちの生きいきとした様子
や手応えは、社会的包摂の事業
を進めるうえで、地域で幅広い
視野をもった担い手を育ててい
くことの重要性を教えてくれま
した。人は実践の現場にふれな
がら、育っていくことを感じてま
した。

実態把握、そして壮大な社会的包摂 の支援体制づくりへ

仙台と埼玉のパイロット事業を経て、
3月には全国で本格的に「寄り添いホッ
トライン」を展開するため急ピッチに準
備が進められています。非常に短期間の
準備ですが、全国のさまざまな支援を展

開してきた多分野の支援者がネットワー
クを組んで体制づくりをしています。同
時に、東北福祉大の学生さんのような地
域の人材の発掘や育成の準備も進められ
ています。

「何でも相談」には、さまざまな悩み
が寄せられるので、それぞれの分野の専
門知識や経験があっても、それだけでカ
バーできるとは限りません。わからない
ことや、どうやって対応したらよいか迷
ったり悩んだりすることでしょう。今回
の事業は「オールマイティな入口として
の専門性」が要求されることから、そう
した新しい専門性の明確化、スキルを身
につけていく方法、体制などが非常に重
要になります。そうしたそれぞれの専門
性の隙間は、相談を実際に受けるなかで
各分野や地域同士のネットワーク力で埋
めていこうと覚悟を決めています。この
事業をきっかけにして一人でも多くの
人たちの悩みが支援へとつながり、そして
社会的包摂に対する意識が高まり、支援
のネットワークが広がっていくことを期
待したいと思います。

苦労の結晶「社会資源リスト」

社会資源リストは元データをもとに
岩手、宮城、福島のさまざまな支援機関
について電話をかけて支援内容や対応時
間など直接調査をしたり、インターネッ
トで調べたりしながら詳しい情報をまと
めていきました。知名度のない活動で学
生がいきなりの電話をして怪しまれるこ
ともあったとか。なかには内気でなか





女川「社会的企業」

一人ひとりが自分らしく活躍し、地域で元気になるために「仕事をつくっていく」ことが一つのテーマとなります。3月11日の東日本大震災の津波で甚大な被害を受けた宮城県女川町で新たに起業することになった女性があります。内閣府の事業「地域社会雇用創造事業」を実施する北海道の共同事業体「北海道地域再生推進コンソーシアム」の起業プランコンペで採択され、会社員から転身して、地元で働く場をつくろうという挑戦です。①在宅ワーク支援②カフェ事業③惣菜屋事業④教室事業の4本の事業を柱に女性が活躍できる場の提供を主とした事業を展開する予定です。代表の須田美喜さんに建設途中のカフェを見せてもらい、女川を案内してもらいながら、お話を聞きました。

※地域社会雇用創造事業（社会的企業支援基金）とは
諸外国では地域社会における雇用の担い手になっている
NPOや社会起業家などによる「社会的企業」ですが、
わが国では事業基盤も総じて弱く、潜在的な雇用吸収力
をまだ発揮できていません。

このため、社会的企業の起業支援および、社会的企業
へのインターンシップをはじめとする研修等を通じ、こ
うした人材を速やかに発掘・養成し、地域社会における
さまざまな生活関連サービスの事業と雇用を加速的に創
造することを目的とし、明日の安心と成長のための緊急
経済対策（2009年12月8日閣議決定）の一環として、
2010（平成22）年3月に本事業を開始しました。

（内閣府ホームページより <http://www.chiikisyakai-koyou.jp/>）



コンテナ2棟をL字に接続し、ウッド
デッキを施工。上・下水道の工事中。
これから階段、什器類設置があり完成
後にスタッフ研修に入ります



●なぜ何かやってみよう、起業しようと
考えたのですか？

震災から月日が経ってしまつて、最
初の頃の考えが「何だったのか」と思う
ことがあります。何もなくなった女川を
見たときに、あのたつた30分かそこらで
何もなくなる、そのなくなった状態の時
点では「人とのつながり」「人が支え合
うこと」が一番だと思ったことではし
ょうか。

被災後、「食べ物を求める」「空間を
求める」「時間を求める」とだんだんと
自分たちが必要なものを求めていった
ときに、次には、友だちと会つてお話をゆ
つくりすることが必要だなと思ってい
ました。そのための場所がまるつきり女川に
はなかったのです。それでカフェをつくり
たいと思いました。その次に、人は身体
を動かすことをしていくのが大事だと思
つて、そういうことをお手伝いできれば
いいなつて思う気持ちがありました。

まだ女川は震災前の気持ちにはみん
な戻ってない。それは悲しい気持ちとか
じゃなくて、朝起きてご飯をつくって仕
事に行つて、帰つてきて、家族との団欒
があるつていう普通の暮らしに戻ってい
ないということです。

いただいた物の中から食べる。仕事





もあまり行っていない。それは職場がない
 こともあります。それより働く意欲が
 失せている。それを少しずつ少しずつ元
 の生活に戻すために、外からいろんな方
 に支援していただいています。それは
 まだ震災の続きなのです。それを元の生
 活に戻すためには町内の人と一緒に仕事
 をしていくというのが一番じゃないかな
 って思います。今、普通の内職仕事では
 考えられないくらいお金をいただく仕事
 があるんですね。たとえば、私たちが

そういうところに「仕事がほしい」と言
 うと、1時間で何個かつくと1個当た
 り500円もらえるというお仕事がある
 んです。それってあくまで「支援のお仕
 事」です。そうじゃなくて、女川町で仕
 事として続けられるものをするためには
 何が必要なのかと考えて、まずは場所を
 つくって人が集まってやっていける仕事
 を考えています。でも、まだ妄想の世界
 の続きという感じです。

●妄想があることはとても大事です。こ
 の世界は本当にそうなんです。それが
 自分勝手な妄想じゃなくて、地域の状況
 をふまえた妄想なんです。はじめてお話
 した後に「この人たちには立派な妄想
 がある。これからはやっぱり女性だ」っ
 て確信しました。

震災前から何かしようと考えていたと
 聞いていました。

地元の水道工事とか設備関係の工事
 の会社の社員でした。事務も現場もや
 っていました。でも、料理したりするの
 が好きだったので、サンマのイベントが
 あれば、そこでサンマの料理をつくって
 販売するとか、女川駅前をイルミネーシ
 ョンで飾るとか。お金を企業にドーンと
 いただいているのではなく、町内で少し
 ずつ募金を集めるというやり方です。だ

からお金がいつもないので山に行って蔦
 を採ってきたり竹を取ってきたりして材
 料にしていました。

それが十何年と続くと認知してもら
 えて、最近では宮城県内のみなさんにお
 ほめいただける規模にはなったんですけ
 ど、それも震災で全部なくなって、笑え
 るくらいですね。

●震災後に地元の方たちによる炊き出し
 をしたと聞きました。その話が非常に印
 象的でした。



イルミネーションを制作中





義援金をいただけるといってお話があったのですが、支援を受けるだけでなく自分たちに何かできないかと思い、震災前に活動していた仲間に炊き出しをしてみようと声をかけました。

震災後1か月くらいまでは、ラジオを聞くくらいで全体の状況がわからなかったのです。全国のみなさんがどういう動きをしているのかわからないうちに、ボランティアの人がいっぱい来たんですよ。あつけにとられて「な、なに？」っていう感覚でした。そういうのが本当にびっくりでした。

私、家があるんです。家があるし家族もみんな大丈夫だった。女川に住んでいるっていうことで被災者なのでしょうけど、町内では被災者扱いはされていま

せん。最初のまるつきり何もない状態のときに、家があると援助がほとんどないんですよ。家がある人にはボランティアの支援もなかったんですね。

その状況で、お年寄りで車の運転のできない人たちがどれだけ苦しんでるのだろう、できたらそういうところに支援をしたいっていう思いがあったんですね。そのときの苦しさっていったら、たぶん、地方から来るボランティアは、避難所だけと瓦礫を片づけることに目がいつちゃう。そういったことは町内に住んでいる人間だからこそのわかることなので、どうかしなくちゃいけないって強く思いました。だからそのメディアに手厚く扱われる被災とかの状況と、そうじゃないところの影の部分というのは、結局どうしたって町内の人間が努力しないといけない。若い人たちがやろうよって言えば動いてくれる、それをひるまずにつながらたいいなって思います。

●被災した人たちが動き出すことが大切ですよね。

最初は炊き出しぐらいと思っていたのに、起業することになったことを「こんなふうになるとは思わなかった」とおっしゃっていましたけど、いざやってみるとどうですか？

怖いですね。何かすごく自分がエネルギーギッシュだっと思うくらい、がんばり過ぎてしまうので、適度に休んだりしながらやっています。最後までもつかなって思いながら。お店を開店させることが最終的な目標ではないので、ここからのがんばりがどこまでももつかなって思いながら。

今は人を探すほうを一所懸命やり始めています。友だちに声をかけながら、カフェをやってもらうのは誰とか。カフェに厨房つくりたいって、ケーキをつくりたいって前から言ってたんですけど、それができないので。できないっていう



カフェの内装





のはお金とプレハブを買うっていうことをいろいろやっていくと年内には冒険できないので、今からいろいろなところに相談しなきゃならないんです。一応はケーキづくりが趣味の人にケーキを焼いてもらってそのケーキを販売する方向をとっていきたくないって。それをしていくと欲が出てくるので、そのケーキづくりが趣味の人を集めて女川の名産になるようなお菓子をつくってそれを販売する。それが最終的には働く場としての形になればいいなっていうふうに思って、カフェをやる。お菓子づくりをする。あの場所を使って、今までの趣味でやってたことをやってもらう、あとは状況を見ながら、そのままお母さんたちがお料理があまりできない状況であれば、お惣菜屋さん

必要なのかなって。それを全部、部門で分けて私は楽をするっていうのが何年か後にくればいいなって(笑)。そしてまた次を考えるの。

●そうやって自分が楽をできるようにしていくほうがうまくいくんですよ。人に一所懸命なすりつけて、自分はどんどん楽になつてく(笑)

そうやって、いろんな人が楽しいなっているっていいですね。

「すぐ動ける」かとか「今やらないと」って言葉をよく聞きます。じーっと見ているとやりたいと口で言っている人はいっぱいいます。本業の人たちが何かをやるという動きがあるんだったら、私は別にやらなくてもいいよってスタンスをずっと守ろうとは思いますが。今までも本業でやっていた人たちがいるんだから。ただ、それがやりたいんだけどできないっていうのも多いので、じゃあちょっと私がやっちゃうよ！にできればいいかなって思って、やることにしました。

●今までやっていたことを続けていくのと、ないところから始めるというのは、まったく違うことなんだと思います。

動きたい人たちも動けないのかもしれないですね。それはしがらみみたいなものがあるから、中途半端にできない

っていうのもあるのかもしれない。

●わからないというのは実はものすごい強みだと思います。わからないから誰にでも聞くし、わからないことは堂々とわからないって言うし…今までやってきた人はわからないって言えなかったりするから。

でも、わかる人を探そうと思ったり、人まかせにするとずっと自分がわからないままになっちゃうから地道に勉強しようかなって思います。震災を体験して自分たちの無力さを感じました。人のつながりをもちたいという思いから始まったことを忘れずに前進していきます。



取材を終えて

須田さんと話していて、自分が予期せず障がい児の親になり、活動することになっていった感覚と重なりました。人は自分ではどうすることもできないことをきっかけに「当事者になる瞬間」があると私は思います。当事者になることは不幸なことではなく、生きていくために必要なプロセスだと再認識する取材でした。(日置)



シリーズ 異分野対談

国内最大のインターネットのファッション通販サイト
ZONOTOWNを運営する

スタートトゥデイの大石亜紀子さん

福祉、教育、医療、経済、政治、文学、美術、音楽などなど、分野ごとにそれぞれの業界があります。実は似たような発想や目指す方向性があっても、お互いになかなか出会うチャンスがないのが現実です。そこで、あまり普段は出会わないような分野の人と出会い、思いを共有し語り合うなかで、一緒に社会に向けて発信し、取り組むために「異分野・異文化が出会う、融合する」という企画を立てました。

第1弾として日経WOMANのウーマン・オブ・ザ・イヤー2011の

消費行動に革新を起こす

日置 ● 今、ZONOTOWNの1か月の売り上げはどのくらいですか？

大石 ● ちょうど1月は100億円を超えたんですよ。出荷件数で1日平均1万600件以上という感じですね。

日置 ● 好調ですね。もともと、何がきっかけでこの商売を始めたのですか？

大石 ● 私たちは商売という感じじゃなく、何となく好きなものを触っていて、お客様のご要望にお応えしていたらこうなったという感じなのです。

私たちは、ブランドもお客様もパートナーだと思っています。自分たちの立ち位

受賞をきっかけに出会ったスタートトゥデイの大石亜紀子さんと釧路ほか北海道で福祉的な課題から地域づくりを実践してきた日置真世に加えて、大阪箕面市のNPO法人「暮らしづくりネットワーク北芝」の池谷啓介さんも飛び入り参加。お互いに「あれ？ 同じようなことを考えてるかも」という共通キーワードがたくさんありました。こうした融合がお互いに次に進むための知恵やきっかけになることは間違いありません。

置を慎重に考えていて、出過ぎててもバランスを崩すことになるので、私たちはブランドデザインやカルチャアの発信というより、消費行動に革新や影響を与えていきたいと考えています。

日置 ● 面白いですね。「消費行動に革新を起こす」というコンセプトはいつの段階で出てきたもののなの？

大石 ● 立ち上げ当初、ファッション業界のインターネット販売に対する理解は非常に低く、どうやったらブランドメーカーさんとパートナーシップを取れるかを創意工夫することが私たちの立ち位置を明確にしていくなきゃいけないと感じました。リアルな街に店舗を持ち、いかに店





日置真世（プロフィール 14 頁）

経済の仕組みを疑ってみる

大石 ● 親になって子どもを育てるうえで、「食」について考える機会が増えたんですけど、東北や関東には農業に適した豊かな土地が豊富ですよ。私自身、信頼のおける生産者や小売店から地元の食材を食べるように努めてきました。だけど、昨年の原発事故の影響で、東日本の農業従事者の方々は大変な苦悩をされていると思います。従来どおりの流通に乗せることが困難な状況に陥ったわけですよ。

日置 ● 本当は、食品は地域で循環するほうがいいですよ。そういう消費行動の変化をまちづくりに何か活かせないかな。今「6次産業」が話題だしね。和歌山の社会福祉法人麦の郷では、障がいのある人たちが「地元」にこだわって本格的な豆腐などの食品加工をつくっています。地元の材料を調達して、地元の人がつくって、地元だけに流通するというスタイルになると、そこに雇用も生まれます。小さい商売だけど、みんなの仕事になるんです。

大石 ● たとえばですけど、私たちは洋服を扱っているの、そこでトレードみたいなことが考えられたら、おもしろ

いと思います。

日置 ● 物々交換？

大石 ● そういうのも新しくないですか？ 究極は物々交換。

池谷 ● それ、いいと思う。結局1個の品しか自分たちでつけれないから、それが流通に乗らないと生活できないという構造ですよ。もともとどこの農村でも多品種多品目をつくっていた。

大石 ● その土地の特産物つてもともとそうだったと思うんです。伝統工芸でも、行商してそれを違うまちの工芸品と取り換える。そっちのほうが本質かなって思うんです。私が言うのと誤解を受けるかもしれないませんが、経済の仕組みにまず疑問をもって考えてみるってすごく大事だと思う。

地域通貨で暮らせるまち

池谷 ● 僕たちの「ネットワーク北芝」では前から地域通貨に取り組んでいます。日本円じゃなくても生きていける地域をつくっていきたいと思っています。

大石 ● 本当に地域通貨の発行を？ どうやっているのですか？

池谷 ● 今は、年金もなくて畑のカボチャをばくするようなおもしろいおじいちゃん





大石 亜紀子 Akiko OHISHI

株式会社スタートトゥデイ 取締役

1976 年千葉生まれ。日本体育短期大学卒業後、派遣社員として働くが予期せぬ契約終了により無職を楽しむお気楽な 20 代 前半を過ごす。20 代後半より真面目に働こうと意を決した際、偶然出会った会社が現職のスタートトゥデイ。当時は従業員 8 人ほどだったが、和気あいあいとはたらく”ことを楽しみ、現在に至る。

<http://zozo.jp/>

ZOZOTOWN (ゾゾタウン) とは、UNITED ARROWS、BEAMS、SHIPS など多数の人気ブランドが集まる日本最大級のファッション通販サイト。最新ファッションアイテムを常時 13 万点以上取りそろえ、公式取扱いブランド数は 1800 以上。

んがにいるんだけど、将来的にそのおじいちゃん地域通貨で日用品を買って生きていけるまちをつくりたいと思ってるんです。カボチャをばくらなくても生きていけるように。そのおじいちゃんがか地域と関わったら地域通貨が手に入って、これで雑貨も買えるようになる。また地域通貨じゃないと参加できない体験型の学習などをやっています。

大石 ● すごいですね。いいですね。

池谷 ● 物々交換も考えているんだけど、問題なのは、そのときのレートがなにかから、物によって値段が違うんだけど、その価値をつけるのがすごく難しいことですね。

日置 ● 物々交換の基本は話し合いだね。

池谷 ● うちの地域通貨は東急系のショッピングモールで一時期使えていたんです。地域でボランティアで掃除してもらった地域通貨をもっておばちゃんたちが映画を見に行くとかが OK でした。だから、可能性はあるんですよ。社会認知とか、地域通貨の意味をどう論じるかだね。

北芝の「地域通貨」

「暮らしづくりネットワーク北芝」では、2003（平成 15）年から地域通貨の調査研究をしています。「ありがたいの気持ちを渡す」試みとして通帳型や紙幣型、期限付き通貨などの発行を繰り返して行いました。現在は形を変えて、「地域共済制度」と「子ども通貨」として人と人をつなげる役割を果たしています。地域通貨は、「自分ができること」と「してほしいこと」の交換で成り立ちます。使い方は、たとえば地域の公園や道路の清掃ボランティアで地域通貨をゲットして、子どもイベントの参加費としてその地域通貨を利用します。イベント主催者は、次のイベントボランティアに通貨でお礼を渡します。このような循環が地域活動の活性化に役立ちます。また、周辺企業や団体と連携して、映画館や喫茶店、お花屋さんなどでも利用できる試みを行ってきました。現在実施している子ども通貨「まーぶ」では、子どもたちが集めた通貨で海外スタディーツアーに参加できるような制度を考えています。地域共済制度では、高齢者の送迎サービスや子育て支援にも利用可能です。地域ニーズを解決するツールのひとつとして、紙幣型の地域通貨が「まち」を豊かにしています。（池谷）



いい人を育てることができる」
かどうか

大石 ● うちは、お給料も部長から一般社員や新卒まで、基本給は全員一律です。役職に応じてプラス役職給というふうにはなっています。昇格する基準というのが「いい人をつくれるかどうか」です。部下を育てられる人には投資しますという事です。すべてがそれでいいにできるわけではありませんが、そこをチュ



ーニングしていくのが私の仕事だったり今後の課題なのですが。

日置 ● チューニング。おもしろいですね、それ。

大石 ● 今まではとにかく「いい人をつくれる人物を評価する」ということは徹底して言ってきました。感性とか感覚をわかりやすくいうと、グレーという感じ。うちには、いろんなグレーを感覚でわかっている人がもともと多かったのですが、白か黒かじゃないとわからないという人も中には交じり込んでいます。そうなってきたときに、グレーで居心地がいい人にロジカルに白か黒か判断しろということを植え付けるのはすごく難しいんです。バランスなんです。

池谷 ● さっき言った「いい人像」みたいなのをちゃんともっているから、グレーでいられるということですか？

大石 ● そうですね。それを言語化もしています。イメージネーション（想像力）とクリエイション（創造力）の両方がある人というのが一つです。二つ目は、ギブ・アンド・テイクのバランスの取れている人。三つ目は、いい人をつくれる人。この三つが軸です。すごく抽象的なので、「何かきれいな事を言ってる」と思うかもしれません、これを掘り下げて想像で

きる力がすごく重要だと思っています。

池谷 ● おもしろい。そういうのをうちもつくってみよう。

グレーのまちづくり

大石 ● 最近、私はこれを自分で「グレーの醍醐味」って呼んでいるんです。ビジネスとか経営をやっていくときに、白か黒かきちんとリーダーシップを取るのとは重要なことです。でも、自然界ではそれが逆に不自然ではないかと思うんです。グレーのままでもいいという空間や時間も認めないといけないと思うんです。それを認めさせるのは経営陣です。その感覚がすごく重要なんですよね。

池谷 ● それで言うと「グレーのまち」って可能だと思う？

日置 ● 究極はそうでしょう。

池谷 ● 僕らが求めているのはそこです。今、僕たちのつくりたいまちはかなりグレーなまちなんです。だけど、いろいろと制度化されていくなかでだんだん思っているグレーじゃなくなるような気がする……。

日置 ● システムとか制度っていうのは白黒つけるのが当たり前の世界だから。グレーの制度があり得るかという話でし



よう。白は何で黒が何だってわかってるから「こうしましょう」って言える。けど、グレーはわからない。グレーを定義した瞬間にそれはグレーじゃなくなっちゃうわけでしょう。

大石 ● 私もそれを考えたんですけど、たとえば100がキャパだとしたら、グレーが許せる人間を100人つくるというのはたぶん難しいと思う。でも、白の人と黒の人を交えて俯瞰して見たときに、グレーというハンドリングは経営においてできるかなとちょっと思っているんですよね。

池谷 ● そうだね。白の人と黒の人がいて、グレーの人がいる。それをマネジメントしていくと、いろんなハレーションが起きるけど、それでもいいやというまちがつくれるといいんだよね。

大石 ● たとえば今年は干ばつだから、黒を強めなきゃってなったときにどう黒を強めるかとか、やっぱりもうちょっと白くしなきゃいけないねということがでさるのがリーダーシップですね。

日置 ● 同時に現場の人とか住民とかもつとチューニングを自らできるようなスキルを身につけることが大事だと思います。「あいつらが悪い」みたいに言ってるだけではなく、もっと自分たち

で決めていたり、つくっていたりする力がみんなにつかないとダメだと思う。

創造して、壊す勇氣

日置 ● お客さんもパートナーと一緒にやっているという話でしたよね。ニーズを出す人も課題を出す人もそれに取組む人も、みんな同じ位置というか同じ立場で、役割が違うだけであって、このシステムを担っているみんなが担い手だという考え方です。みんなでこのシステムを回しているという発想でもあるよね。

大石 ● 私たちは昨年の4月以前、不良品以外は「返品不可」にしていたんです。その意味は深くて、自分は消費者だとみんな思っているのですが、逆の立場もありきで、企業の利益を圧迫するというのはまわりまわって自分たちに降りかかってくることでもある。きちんとした消費行動をとるとか責任をもつとは、そういうことだよと知ってほしくて「返品」は受けつけていなかったんです。とはいえ、それによって利用の壁が高いという意見があったことと「お客さんと友だちになろう」というのが今期のテーマの一つで

池谷 啓介 Keisuke Ikegaya

NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝 事務局長

「コミュニティワーカー」としてまちのニーズを形にするサポーター
「暮らしづくりネットワーク北芝」

大阪北部箕面市にある北芝は、「誰もが安心して住みつづけることのできる地域」をめざして住民を主体にした活動を展開しています。我々、NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝は、まちの人やグループを支える中間支援の活動を10年間行っています。コミュニティレストランやコミュニティハウスの自主運営、市立老人センターや人権文化センターの指定管理業務も行っています。NPO の職員は「コミュニティワーカー」として日々、住民ニーズに視点をあてた取り組みを進めています。

<http://www.hcn.zaq.ne.jp/kurashi-net/index.html>



もあつたので、今までこういう理由で返品をダメだと言っていたけど、今年はやめました、という感じでやっていきます。

池谷 ● そういう消費者側の意識改革に乗らない人たちが出てきたときに、ちゃんとマネジメントしているということですよ。

大石 ● そうですね。そこはトップのハンドリングですね。新しいものを創っていくとか壊す勇気とかそういうことがとても重要なんです。

池谷 ● 僕たちもイベントとか3年くらいするとたくさん人が来るようになるんだけど、「もう、あかん」って言ってやめる。それで違うことを始める。それは、けっこう重要なことかなと思っている。

日置 ● それは何で？ 感覚的に何か感じとってやめるということ？

池谷 ● 何だろう……。このまま行くとおもしろくなるという感覚。違う価値観が入ってくるというようなことが、刺激になるからかな……。たぶん、刺激と創造性だろうね。

大石 ● 共鳴感があるときは楽しいじゃないですか。エネルギーの質がいいというか。それが停滞してしまったり、依存し合ってしまうと気持ちのよいものではなくなってしまう。

日置 ● 依存が気持ち悪いというのは健全なセンスですよ。何の疑いもなくそこに乗っかっていることに安心感を覚えちゃう。だから、新しいことをやることにすぐ臆病になる。依存をどこかで断ち切らなきゃならないということは感じますね。

大石 ● バランスを崩しちゃうんですよ、すぎるものがなくなると。本当はメンタルなものも循環なので、みんなが共感して共鳴感があって回っていれば成り立つものなんですよ。だから自然でいることって大事です。

日置 ● そうそう、自然体が一番大事だと思う。不適応を起こす子どもや若者なんて宝物みたいなものだよね。この世の中に身をもって異議を唱えて「学校になんか適応できない」って言ってるわけだから、「あんた、ほんとに健全だね」って言いたくなるもんね。

「働く」を創造していく力をつける

日置 ● 「仕事づくり」というか経済活動に弱いんだよね、私たち福祉や教育の業界って。でも、そこが最後の課題だというのはみんなわかっている。困っている人をキャッチして、その人たちがらしく

社会で生きられるように考えたときに、今の市場の仕組みが最も彼らを排除しているわけだから、そこを変えていかないと、ということも。「今の企業はとんでもないよね」と批判して終わっちゃっているところがまずいんだよね。

大石 ● みんなと同じように振る舞うことや間違った協調を学ぶために学校に行かされるのではなくて、活かせるものを見つけない学校に行こうと思えたらいいですよ。活路を見出せるアドバイスが社会全般的に少ないと感じますね。

日置 ● 「働くを創造する」ということでしょ。働くというのは受け身じゃなくて、自分からつくっていくというか。

大石 ● そうですね。だから「好きなもの何？」「それいいじゃん、やってみなよ」とかね。若い人たちに、「働くって何？」とか「働いて私は楽しいよ」「こういうふうになるんだよ」とか、そういうことを伝えていくほうが、社会的に利益があるのかなと思います。



制度のことでもくっちゃべるんだべよ

(制度のお話でもしましょうか)

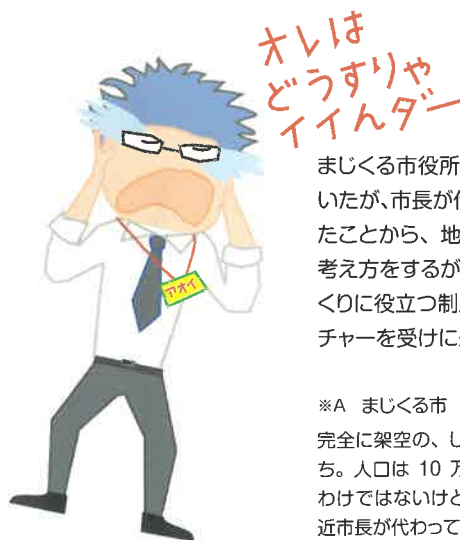
まじくるをご覧の皆さま、はじめまして。^{またむら}又村と申します。このコーナーでは法制度（特に行政制度）について、できるだけ専門用語などを使わず、会話形式で進めていきますので、よろしくお付き合いのほどお願い申し上げます。

ちなみに、又村が生まれも育ちも神奈川ですので、会話の中に相模弁（神奈川弁）が入ります。少々乱暴な感じのする方言ですが、怒っているわけではないのでお気軽にお読み下さいね。



師匠

謎のキャラ。制度の成り立ちや役割、使い方などには詳しい模様。又村係長が困ったときに相談する相手らしく、いろいろとレクチャー、議論してくれる。が、なぜかバリバリの相模弁。



又村係長

まじくる市役所（※A）の係長。長く障がい福祉部署にいたが、市長が代わって「地域づくり」が重点政策になったことから、地域づくり部署へ異動に。比較的柔軟な考え方をするが、障がい福祉畑の知識だけでは地域づくりに役立つ制度はつくれないと考え、「師匠」のレクチャーを受けに来た。

※A まじくる市

完全に架空の、しかし皆さんが住んでいる地域とよく似たまち。人口は10万人くらい。財政規模も中の上、余裕があるわけではないけど破たん寸前というほどでもないレベル。最近市長が代わって「地域づくり」に力を入れはじめた。





おお、又村じゃねえか。久しぶりじゃんかよ、どうしたのよ、何か用け？



…相変わらず相模弁バリバリですね。いや、実はこのたび異動になりまして、地域づくりの活動を支援する部署に配属されたのです。それで…



そんであれか、今までの障がい福祉系ノウハウだけじゃ太刀打ちできねえから、もうちっと幅広く制度のことを知ってえのか。*そうっだべ？



これまた相変わらず鋭いですね。そのとおひです。



んじゃあよ、オメーの専門分野じゃないところから考えてみんべえか。

まず、よく言われる「高齢化」だな。オメー、日本の高齢化率がどれくらい知ってんの？



だいたいですけど、20〜25%ってところですね。



おうよ。こんなのは一般常識だな。じゃあよ、その比率になるまでどれくらい時間がかかったかはどひっ。



高齢化するまでの時間…ですか？



んだよ、わかんねえのかよ。いいか、日本は高齢化率が7%を超える「高齢化社会」の状態から、高齢化率が21%を超える「超高齢社会」になるまで、40年弱しかかかってねえんだよ。



ほかはどうなんですか？



だいたい、ほかの国なんかまだ「超高齢社会」になってねえもんよ。だげんどよ、予測じゃあ短い国でも80年、なげえ国なら150年くらいかけて高齢化が進むってわけよ。日本だけだべ、こんな勢いなのは。



ハンパじゃないですね。



だべ？ もっとスゲー数字もあつてよ、2050年には高齢者人口が約40%になるんだってよ。で、同じ頃の障がい者数の人口比率を国際標準で考えると、若い世代の障がい者比率が約7%みえらしんだな。



エッ？！そうしたら、人口の半分は高齢の人が障がいのある人ってことになるじゃないですか！



おうよ。でよ、いつまでもねえけど、それ以外にも少子化、生活保護、一人親（特に母子世帯）、児童虐待に犯罪被害、ひきこもりや依存症…社会課題はいろいろあんべ？ そついうの全部足したらどうなんのよ？ 下手したら人口の過半数が「支援を必要とする人」になつちまつかもしれねえよ。

社会保障に関しては、どの分野も大変なことになってんの。そついう意味じゃあ、オメーのこの市長さんも危機感をもってるってことだべ？



なるほど…障がい福祉分野以外にも、地域生活に関する課題が山ほどあるのか…



まあ、そつはいつてもまずはオメーの得意分野から話してみなよ。そしたら他の分野と共通点が見えてくんかもしねえしよ。



はい。実は障がい福祉分野はここ2〜3年で大変なことになってまして…

※B 相模弁

主に旧相模国エリアを中心に、神奈川県で話される方言。語尾が「〜だべ」「〜じゃんか」になる、「熱い」を「あちい」と言つなどの特徴がある。喋り方は少々乱暴。特徴的な単語が出てきた場合は別途解説します。



まず2009年（H21）8月の総選挙で政権交代した際に、マニフェストで「障害者自立支援法廃止」が掲げられていたことから、自立支援法を廃止した後の法律づくりが始まりました。



今のところ「障害者総合福祉法^{※1}」
って呼ばれてるやつだな。

※1 障害者総合福祉法（総合福祉法）
現行の障害者自立支援法（自立支援法）に代わって、障がい者福祉サービスのルールを司る予定の法律のこと。自立支援法が利用者負担（当初は低所得の人でも1割負担を課していた）や障害程度区分（介護保険の要介護度認定に似た仕組み）の課題などを抱えているため、現在のところ自立支援法を廃止して総合福祉法を創設することになっている。2011年8月に法律の骨格が提言され、今年（12年）の通常国会で法案が提出され、来年（13年）8月に施行される予定。



ところが、今の政権は自立支援法を廃止することが目的というより、障がいのある人に関わる制度全体を見直すことを目指しています。1つの到達点として国連の「障害者権利条約」の批准を考えているようです^{※2}。

※2 障害者権利条約（権利条約）

2006年に国連で採択された国際条約。障がいのある人を「権利の主体」ととらえ、生活のさまざまな場面において障がいのある人の人権（尊厳）の尊重を批准国へ求めている。日本はこの条約を「批准」（条約の内容を国として最終的に確認・同意すること）しておらず、「署名」（条約の存在を認めること）にとどまっている。



そつすんと、当然福祉サービスの
ことだけやって他をおろぬくわけ
にはいかねえなあ^{※3}。



そつです。なので、福祉サービス
以外の部分も含めた全体的な議論
をするために「障がい者制度改革
推進本部」と「推進会議」それに「専門部会」
が設置されました^{※3}。

その結果、次々と法律の制定や改正が進んで
いて、まず、昨年6月には「障害者虐待防止
法」が制定されました。今年の10月から施行
されます^{※4}。

※3 障がい者制度改革推進本部など
障がいのある人の暮らしに関係する法
律や制度を見直すことを目的に設置さ
れた組織。「推進本部」は最終承認機関。
構成員は閣議メンバーと同じで、閣議
と抱き合わせで開催。「推進会議」は
障がいのある人の意見をできるだけ取

り入れるため、委員の半分以上が障が
いのある人や家族となっている。内閣
府が担当省庁で、内閣府側の責任者も
身体障がいのある人が務めている。「専
門部会」は、障がいのある人に関する
法律や制度のうち、特に具体的な法律
をつくるための話し合いを専門に行う
組織。推進会議同様に、障がいのある
人の意見をよく聞きながら進めるた
め、委員の半分以上が障がいのある
人や家族となっている。現在のところ、
差別禁止に関する部会（差別禁止部会）
と障害者総合福祉法に関する部会（総
合福祉部会）に2つがおかれている。

※4 障害者虐待防止法

正式には「障害者虐待の防止、障害者
の養護者に対する支援等に関する法
律」と呼ばれる。家族や支援者（福祉
サービス事業所）、企業などによる障
害者虐待を定義するとともに、市町村
と都道府県に虐待通報受理と保護、啓
発などを義務付け。虐待対応の窓口は
原則的に市町村へ一元化される。



児童分野と高齢分野には虐待防止
法があつたのに、なんでか知らね
えけど障がい分野だけ遅れてたん
だよな。市町村に「障害者虐待防止センター」
をおおきなやなんねえし、結構大変じゃなか
よ。

※5 おろぬく
引き抜く、間引く、抜きにする などの意味。





そして、7月には「障害者基本法」が大幅に改正され、8月から一部施行されました^{※5}。

※5 障害者基本法の改正

障害者基本法は、障がいのある人に関する施策を進める際の基本的な考え方を示した法律。推進会議における議論をふまえ、権利条約の批准も見据えて大幅に改正された。障がいの者の定義の見直し、差別的禁止、地域における共生、インクルーシブな教育（子どもや保護者の意向の尊重）、地域療育の整備、職業相談や雇用の促進、住宅の確保、本人の意思決定に配慮した相談支援、防災・防犯（消費者被害からの保護）、文化活動やスポーツへの参画、選挙における配慮、司法手続き（取り調べを含む）への配慮、国際協調などが盛り込まれた。



おうおう、すいぶんと見直されたもんだなあ。だけど、こりゃあオメー、中身を見ると市町村エリアでやらなきゃなんねえことが目白押しだな。



そうですね。少なくともひと昔前の「障がいのある人は家族同居が前提、家族がいなくなったら入所施設へどうぞ」という考え方は完全になくなりました。そのぶん、障がいのある人の地域



生活を支える仕組みが大切になりますから、市町村の役割が増えてくるわけですが。

そりゃそうと、さっきの総合福祉法はよお、順調に行っても来年の8月施行だろ？ その間はどっすんのよ？ 廃止を決めるくれえ評判の悪い自立支援法を、そのままにしておくわけにもいかねえべ。



はい。そのことは推進会議でも総合福祉部会でも指摘されていました。また、自立支援法には「施行後3年経過したら見直す」という規定がおいであつたので、そういったことをふまえて2009年12月に自立支援法や児童福祉法の改正が成立し、今年の4月から全面施行されることになっています^{※6}。

特に障がいのある子どもへの支援については、市町村としてノウハウがないケースがほとんどです。所管部署を障がい部門におくのか、子育て支援部門におくのかについても考え方に差が出ました。

※6 障害者自立支援法・児童福祉法の改正

正式名称は「障がい者制度改革推進本部等における検討をふまえて障害保健福祉施策を見直すまでの間において障害者等の地域生活を支援するための関係法律の整備に関する法律」。あまり

に長いので、「整備法」「つなぎ法」と呼ばれている。利用者負担や障がいの者の範囲の見直し、相談支援の充実、グループホーム・ケアホーム利用の際の助成（家賃補助）のほか、障がい児施設の一元化と支援主体の都道府県から市町村への移管などが盛り込まれた。特に障がい児支援については、これまで都道府県（児童相談所）が担ってきた機能が施設入所を除いてすべて市町村へ移管されることとなり、財政措置や体制整備などが大きな負担となっている。



なんだよ、そりゃあそれで市町村のやるが増えんなあ。



増えますね。総合福祉法や差別禁止法についても実施主体は間違いなく市町村になるでしょう。



とりあえずよ、今までオメーが話したことを時系列で並べてみな。ふーん、こんだけいろいろあんど、今までと同じじゃあつとるよな^{※7}。

※D つつとる

元は（棒などを土へ）突き刺すという意味。転じて仕事などが滞るといふ使い方も。



はい。通常、法律を新しくつくる場合には1～2年の準備期間が必要なのに虐待防止法は半年しか準備期間がないんですよ。そんなこともあって相当の人員増強をしてもらわないと…



…まじくるっていいのかな？



いや、それもそうだけど、もっと根本的に考え方を変えるってことよ。

2010 22年	冬	【自立支援法（整備法）】12月に法案が成立、公布と同時に一部施行（発達障がい制度対象であることの明確化など）
2011 23年	春	【虐待防止法】6月に法案が成立 【障害者基本法】7月に改正法案が通常国会で成立（8月以降順次施行）
	夏	【総合福祉法】8月に総合福祉法の骨格を取りまとめ
	秋	【自立支援法（整備法）】10月から一部施行（グループホーム・ケアホーム利用者に対する特別給付金（いわゆる家賃補助）や、視覚障がいのある人の外出支援の個別給付化（同行援護）がスタート）
	冬	【総合福祉法】提言された骨格に対する障害当事者団体などへの意見聴取（または団体側からの意見発表）、法律条文や政省令案の作成
2012 24年	春	【自立支援法（整備法）】3月までに旧法体系施設が自立支援法体系へ移行、4月から全面施行（利用者負担の見直し、相談支援の充実強化、自立支援協議会の法定化などがスタート） 【児童福祉法（整備法）】4月から全面施行（都道府県（児童相談所）が担ってきた機能が施設入所を除いてすべて市町村へ移管、児童デイⅠ型と通園施設の統合（現行の障がい児施設の一元化）、学齢児が利用する「放課後等デイサービス」や支援者が地域の園へ出向いて支援する保育所等訪問支援などがスタート）
	夏	【総合福祉法】法案を通常国会へ提出
	秋冬	【総合福祉法】法案が可決・成立した場合、法施行に向けた政省令や通知の整備と自治体への情報提供スタート 【虐待防止法】10月から全面施行（市町村に「障害者虐待防止センター」を設置し、虐待の通報受理や立ち入り調査、緊急一時保護などを実施）
2013 25年	上半期	【総合福祉法】引き続き法施行に向けた準備や試行・検証、遅くとも8月までに施行 【差別禁止法】法案を通常国会へ提出
	下半期	【差別禁止法】法案が可決・成立した場合、順次施行



又村あおい Aoi MATAMURA

1973年生まれ。1995年に神奈川県平塚市役所採用。99年度～06年度まで障害福祉課へ在籍（当時の担当は、障害者福祉計画、支援費制度・自立支援法の施行担当、障がい児支援全般）。神奈川県庁（総合政策課）への出向を経て、現在は企画課企画政策担当に所属。

（福）全日本手をつなぐ育成会の情報誌『手をつなぐ』編集委員や政策研究開発センタースタッフ（社）日本発達障害福祉連盟の『発達障害白書』編集委員 障害福祉制度全般と、障がいのあるお子さんとご家族のための支援制度、障がいのある人の支援を通じた地域づくりなどが主な活動分野。

きたいと思います。師匠には、もうちょっとわかりやすい方言使いをしていただきましよう（笑）



というわけで、今回は障がい福祉分野だけでなく、もう少し全体的な視点から制度の現状を探っていきなす。



それは次回以降でやるとすんか！とりあえず、もうちょっと障がい分野以外のことも見てみんべえよ。





高校生が



先生に



聞きました①



釧路公立大学小磯学長に 「地域経済」について聞く

地域課題の解決、これからの社会づくりに向けてはいろいろな分野の専門家が研究をしています。しかし、その多くは専門的で難しく、一般の人たちにはなかなか理解できないものだし、専門家にもなかなかお目にかかれないのが現実です。このコーナーは専門家のところへ子どもや若者が訪ねて行って、アカデミックな話を自分たちにわかるように教えてもらおう！ という企画です。優れた研究がたくさんの人たちにわかりやすく伝わり、そして自分たちの問題としてとらえることにつながるのではないかと思ったからです。何もわからない子どもたちだからこそ大活躍できること間違いなし！

取材前談：

テーマは「釧路市はこれからどうしたら元気になるか？」そのためにこれからの若者に何ができるか？です。

インタビューの高校生を探すべく、冬月荘の※スクラムOBに連絡。3人が趣旨もわからず快諾してくれました（笑）。本番の前にメンバーと集まり、趣旨の説明と作戦会議。それぞれ何を聴いてみたいか話し合いました。とはいっても本人たちには何ら主体性はないし、公立大学の存在もぎりぎりわかるくらい。さて、どうなることやら…。

取材当日：

3人の下校時に迎えに行き、公立大学へ。車内は誕生日のプレゼントを渡したり、はしゃいだり、いいノリで公立大学の校門をくぐり、4人はいざ大学構内へ。今回の場所は学長室。奥に進むにつれて、3人は貝のように。学長室をコンコンとノックする前に、後ろの3人を見ると、まるで新鮮なアサリのように。がっちり口を閉じて、力のない苦笑い。「どうぞー」小磯先生のやさしい声が聞こえました。中に招かれると顔はこわばっています。その雰囲気のまま、立派な円卓を囲み取材は始まったのです。

まずは自己紹介。小磯先生が口火を切って高校生たちに声をかけてくださいました。

※スクラム（正式にはZetto・Scrum）、釧路市生活福祉事務所からの提案で始まった中学生等を対象とした勉強会。教えるのは大学生や生活保護受給者の社会人など。単なる勉強会ではなく、教えたり、教えられたりという関係から、お互いが支え合う関係が生まれるというまじくるの場。

小磯 修二 Syuji KOISO

釧路公立大学学長、地域経済研究センター長

1948年5月大阪市生まれ。1972年京都大学法学部卒業。国土庁、北海道開発庁（現国土交通省）等を経て、1999年6月より釧路公立大学教授、地域経済研究センター長、2008年4月より学長。専門は、地域開発政策、地域経済。内外のスタッフを機動的に集めて幅広い分野での地域課題の解決に向けた共同研究プロジェクトを数多く実施。また、中央アジア・中米諸国での地域開発プロジェクトにも関わるなど、実践的な地域研究活動を展開。公職は、国土審議会専門委員、北海道観光審議会会長他。著書：「戦後北海道開発の軌跡」（2007年6月）、「地域自立の産業政策」（2007年11月）他。



小磯先生…高校出た後はどういうことをしたいと考えていますか？

ちあき…美容師になります。

まりな…今ちょうど、就職活動してて…。

小磯先生…今就職も大変だもんね。大学生も大変だね。

—まりなも2期生だね。この春に就職希望なんですけど、そんなときに僕に一本電話くれて。「これから就職のこと、考えて、どうしようかな」って。他の学生からも聞いていると、高校などで行われている進路指導やキャリア教育が実際の学生の感覚や地域の雇用の現状にはフィットしない面もあるようです。やっぱり就職の口が少ないので、そこについて待っているだけではなく、みんなで考えてみようとなったんです。今、実は土曜日に「まじくるハイスクール」という就活の場をみんなで創っていこうと動き始めています。その元になったのがまりなの1本の電話だったんですよ。

小磯先生…それはいわゆる職探しみたいなものじゃなくて？

—社会に出るために自分たちが実際に学ばないこと、自分たちが本当に必要としていることをみんなで話し合い、学び合ったり。ね？ まりな。

まりな…そうですね。なかなか就活といっても難しくって、やりたいことも何なのかわからないので…。

小磯先生…うん、真剣だね。そこね。

まさし君は定時制ってことは昼間は何かしてるの？

まさし…いや特に何もしてないです。

—背景をつけ加えると、まさしは冬月荘スクラムの1期生の女子メンバーの親戚になるんです。1期生が通ってた頃に、まさしがまだ中学1年生で、ちよつとひきこもりがちだったんだよね？ それがちよつと心配で冬月荘に連れてこられたんだよね。

まさし…うん、そう。

—今、高校に通ってて、でも学校では自分のうまくいってなくて。ちよつとひきこもりがちではあるんだけど、だんだん冬月荘に関わりながらも将来

ゆっくり考えようかってところになってね。

小磯先生…今日この場というのは、高校生のみなさんと私が意見交換をして、やっぱり地域の問題を1つか2つ、何かこう前に進めていけるようなきっかけになればいいなと思いながら楽しみにしていました。

—たぶんこの状況だと、緊張して一方通行になつてしまいがちですけど、みんなもわからないことはわからないって突っ込んでもらっていいからね、全然…とは言ってもこの雰囲気で、はじめてだしね。大学入ること自体がはじめてで、しかも一番奥の学長室ってね（笑）

3人…ははは

小磯先生…この大学の学生でもこの学長室に入ったことのある学生っていうのはほんとにわずかなんですよ（笑）

まさし…それは緊張するわ…

—すごいさつきは喋りまくってましたから。今だんだん上がってくると思うんですけど（笑）



小磯先生…それを期待しましょう(笑)

地域経済研究センターと地域について

ちあき…じゃ…地域経済研究センターは何をしていますか？

小磯先生…では私が何をしているのか自己紹介を含めてお話しして理解してもらったうえで、質問してもらったほうがいいですね。

私の出身は関西で、高校時代は四国の高松という所でみなさんと同じ高校時代を過ごしました。小学校時代は九州の福岡にもいたことあって、親と一緒に生活することも少なかった。大学で京都に戻り、そして社会人になるときに東京に行きました。今は北海道ですから、日本の4つの島すべてで暮らしたことになりました。私の一番の転機は、学生時代の70年代の学園紛争ですね。

わかりますか？

ちあき…わかりません(笑)

小磯先生…当時の日本社会は学生が日本の社会を変えるんだという闘争があり、警察や機動隊と学生がぶつかるよう

なそういう世の中だったんですよ。そのなか自分は何をしていいのかよくわからないわけ。果たしてそれで世の中変わるのか？というね。それで私は旅に出たんですよ。いろいろな所へ行ってみると地方と大都市にもすごい差がある。やっぱり地方は非常に貧しくて大都市に比べていろんな面でハンデがある。一方で、欧州には美しい地方がある。そういう地方という問題に関心をもったんですよ。

そして13年前に行政の仕事から大学に移ったんです。自分のやろうとしているテーマ、それは一貫して「ハンデのある地方がいかに元気になるか、活性化していくか」なんですよ。

4人…うんうん

社会への関心

まさし…えーと、釧路は元気がないって聞くんですけど、そもそも今の釧路っていうのは元気がないんですか？

小磯先生…どう思う？ 元気ないと思う？



上田 麻里奈 (ウエダ マリナ)

中学3年生でコミュニティハウス冬月荘のZっと! Scrumに参加。現在高校3年生。来春に向けて就活中。まじくるハイスクール産みの親!? (写真右端)

岩田 千明 (イワタ チアキ)

中学3年生でコミュニティハウス冬月荘のZっと! Scrumに参加。現在高校3年生。卒業後に美容師の専門学校に進学。絵も得意なスクラムのクリエイター。(写真右から2人め)

木内 雅史 (キナイ マサシ)

中学2、3年生でコミュニティハウス冬月荘のZっと! Scrumに参加。現在定時制高校2年生。自称「大人っぽい」(笑)(写真左端)



まさし●…うーん、よくわかんない…。

小磯先生●…それが正直なところだと思うんだよね。

私が思うには大都市の元気に比べて地方というのは非常に元気がなくなっている。これはさっきもふれたように、大都市と地方の格差っていうのかな。

ここ10年間くらいは特にその差がどんどん広がってきている。だから大きな流れの中で釧路に身をおいていると昔に比べれば元気がなくなってきたと思うのかもわからないよね。

まさし●…なぜそうなったんですか？

小磯先生●…それには地域を理解することが大事です。みなさんもこれから社会人として働くと思うんだけど、いったい自分のおかれてる地域がどういう地域なのか、それを自分の頭で勉強して理解してやろうっていうのは大事なことだし、おもしろいことなんです。社会への関心かな。すべてを理解することはできなくても1つでも2つでもそういう形で学びながら、いろんな人に聞いたり、高橋さん（引率者のタカさん）に相談したり、そういう中でどんどんぶつけてい

きながら自分の疑問を解くという学びの中で、自分のやりたいことが見出されていくんじゃないかな。

—ちあき、どう思う？ 釧路って元気な
いと思う？ 遊んでたりしてどう？

ちあき●…そこまで思ったことないかなあ。

まりな●…北大通りとか見るとやっぱリ
シャッターが多いし、活気はないなって
思いますよね。

まさし●…活気あるないって言ったら、
なさそうな感じはするね。

小磯先生●…中心部はひっそりしてるよ
ね。でも郊外のイオンとかポスフルとか
釧路町になるんだけど行くと、たくさん
さんがいて、決して元気がないことな
いよね。

釧路市は18万3千の人口がいて、その人
たちが活動して消費しているんだから、
そういう活動がどこかにはあるんだよ
ね。それが昔は釧路の町中にみんなが集
まって中心部でそういう営みが行われて
いた。

ところがいつの間にか車社会になって車

さえあればどこにでも行けるから、商業
施設が立地しやすい遠くの所に駐車場を
たくさんつくって、そういうところにみ
んな行っている。

そうすると元気がないんじゃないかって、元
気のある活動が分散されちゃって結果的
に町の中が元気がなくなっちゃって寂しくなっ
ているということなのかもわからない。

釧路、好きですか？

ちあき●…好き（笑）

小磯先生●…釧路のどんなところがいい
と思う？

まさし●…自然で空気がいいかな。

まりな●…うーん、でもやっぱ、自分が
生まれ育っている場所だから言葉では言
えない何かがあるんだと思います。

—若者と話すとき釧路にほんとは居たいっ
て言う人が多いですね。

小磯先生●…一度や二度は釧路を出てい
くのもありですよ。

たとえば、大学出てからもすぐに就職す
る人もいますけど、就職しないで旅に出
て、いろんなところでいろんな見聞を深



めていくというね。旅って最高の学びの場なんです。これは難しい言葉ですが比較方法論というんですけど、みなさんぜひ覚えていてほしい。自分が何か行き詰まってわからなくなったときや迷ったときは他に比較するものを改めて見てみるというね。

— そうですね、さつきここに入るまでは旅気分ですごかったですもん(笑)

まさし…そうだよ(笑)

夕張市と釧路市

まりな…よくテレビで夕張市の次に釧路が経済的に危ないって聞いたりもするんですけど、どういうふうに危ないのかわからないんですよ。

小磯先生…夕張というのは、地域が破たんしたのではなくて夕張市の役所がいろんな仕事をするときにたくさん借金をして、それを市民にわからないようにしてたわけね。そしてどんどん借金がふくれ上がって、ある日突然その額見たら巨額になっていたんです。市役所としては財政的に破たんし、今は新しい夕張市としてやっているわけね。

実は釧路市も同じようにすごく大きな借金を抱えてたんですよ。ところが夕張とはまったく違う状況になっている。私もちよっとお手伝いしたんですけど、市長が新しくなって、はじめて釧路市の150億円もの借金に気がついたんですが、すぐに釧路は借金これだけありますと市民の前でオープンにして、毎年10億くらいならということで返し始めたのです。

4人…へへ。

小磯先生…この再建の取り組みや生活保護の自立支援、そして冬月荘の取り組みなどを勉強するために、たくさん視察が釧路に来ていますよね。

— 赤点テストは正直に出したほうが楽だというのと似てるかな？ 靴のこういうところに隠したりしてる場合じゃないか(笑)

3人…あははは、だよ。

小磯先生…当面は隠すことで楽になるかもわからないけど、将来それがバレたときは大変なことになるね。

今すぐ正直に話すのと、ずっと隠して後で話すのでは、やっぱり後のほうがつら

いと思うんだよ。

まさし…わかりやすい。

— 返済15年だから、終わったらみんな何歳？

まりな…33？

— 子育てしてる頃かもね

就職率の背景

まさし…釧路って何で就職率が低いんですか？

小磯先生…これなかなか難しく、就職率っていうのは働く場ですから、企業活動が活発でないとやっぱり働く場がないんです。経済が活発になってきたら当然、働く場・仕事が増えてくるんですが、それだけではない要素もある。昔は企業がたくさん雇ってくれたの。ところが今は人を雇うということに対して企業側が少し慎重になってきている。だから、正職員で雇わなくてもパートとかアルバイトで賄う部分も大きくなってきたし、それから人を雇わないで機械でやるという製造業も増えてきている。これから大事



なのは人手を多く使うサービス産業。たとえば、私もそうですけど、どんどんお年寄りが増えていく。そうなってくると医療・福祉・介護の現場での仕事っていうのが増えてくる。

働く場をつくる

小磯先生…決して看護師になるとか介護士になるだけじゃなくて、そういういろんな周辺の産業もあるんです。

たとえば、病院や福祉施設もそうですけども、かなりの大事な部分っていうのは食事の提供ですよ。朝・昼・晩食べるでしょ。そのときに高齢者が食べやすいような非常にやわらかい、それでも味の落ちない地元の産物を使ったような新しい食品を開発するとか、提供していく企業をつくっていくこともこれから大事だと思うしね。

だから、就職率低いんだけど、どうやってこの地域の中で働ける場をつくり出していけばいいのか、そういう発想で考えていく必要があるんじゃないかな。

少し先の自分…

小磯先生…みなさんはどういふ分野が

得意ですか？ これならやってみたいなということはある？

まさし…俺の場合はIT関係、パソコン使って仕事がしてみたいです。

小磯先生…それはすごい。それもこれから大事な分野だよ。情報通信事業っていうのはどんどん革新しているから、それはしっかり勉強したらいいよね。必ず伸びる分野だからね。

まさし…そうですね。

小磯先生…IT技術っていうのは地方の不便さとかハンデっていうのをずいぶん克服したわけだし。だから別に東京に行かなくてもIT技術さえあれば地方でもしっかりしたい仕事ができるしね。

まさし…へえー(嬉)

小磯先生…いろんな意味で可能性のあるおもしろい仕事ですね。まりなさんは？

まりな…なんだろう。興味があるのは福祉関係ですけど、でも今授業で習ってる

ことや今まで習ってきたことを含めたら、サービス業で習ってきたことを活かせるのであればいいかなって思います。

小磯先生…たとえば福祉だとお年寄りの面倒みるとか子どもの面倒みるとかいろんな分野があるよね。

自分ならどういふところがいいですか？介護とか？

まりな…介護はまだ自分には…。

小磯先生…これから介護ですごく大事な分野だしね。どんどん技術高めていくことによって、やりがいのある広がりのある分野ですからね。

自分たちに何ができるか？

まさし…釧路を元気にするために、住んでいる自分たちは今、何ができると思いますか？

それと、もし何かできるとして、俺たち若者が何かして変わるものなのか…？

小磯先生…これはいい質問ですよ。この質問をしたまさし君の気持ちの中には、何か地域は変わってかなくちゃな



らないという思いもたぶんあるんでしょ
うね。そのなかで自分自身では何ができ
るのかっていう不安もあるんでしょね。

でもね、その質問に対しては少なくとも
地域に住んでる一人ひとりが何かしなけ
れば地域は変わらないんだよね。地域に
対して不満をもつ人が多い。いろいろ批
判的に釧路はダメだ、元氣ない、錆びれ
ている、そういう第三者的に語る人は多
いんだけど、そのなかで私はこれだけ
ちゃんとやるよと実践してる人がどれだ
けいるかどうか。実は地域に関わってみ
ようという人たちがどんどん増えてくれ
ればそれで地域は変わるんですよね。

答え方は難しいんだけど、まず何か自
分にできることを見つけ出してやること
じゃないかな。

たとえばどうでしょうか、まさしくんの
ハンドルネームで釧路からITを使っ
ておもしろい発信があるとするよね。釧路
の自然とか夕日でもいい。魅力のある写
真と一緒に釧路のいろんな情報がいつも
流れてくると、「じゃあ今度行ってみよ
うか」という人が1人でも2人でもでき
たら、その人たちが釧路に旅行に来たら
どうですか？ ここで宿泊し、食事をし
ようとするとこの地域の消費が上がるで
しょ？ この地域の経済の発展につなが

るよね。一人でもやる気になればできる
わけですよ。

まさしく…おもしろそう。できるんだ…
(嬉)

—そもそも俺たちがやって変わりますか
っていうことでいうと、十分に変わると
いうことですよ。

小磯先生…今日私が話したことの1割
もわからなくてもいいと思う。でもひと
言でもふた言でも何か残ってみなさん方
の次の活動につながってくればそれで
いいと思います。

人生ってこういう出会い、きっかけ、こ
れが大事、うん。

—なかなかこういう出会い方はないけど
ね(笑)

3人…あははは(笑)

小磯先生…みなさんがこれからどうい
う人生を送られるのかわからないけど、
いろいろチャレンジされたらいいです
よ。旅をしていろんな人と出会って出会
ったらやっぱり話をする。人ってい
い人も悪い人もいるんだけど全部悪い人
なんていないから。いいところもあるし悪

いところもあるし、癖もあるし、もち味
もある。それを引き出して自分の経験に
結びつけていく。一期一会というけどね。
ぜひ若いうちに旅をして、いろんな人と
出会っていろんな会話をしてほしいと思
いますね。

—まじくるの前に漢字ついてるじゃん
「地域起業創造センター」って。あれ小
磯先生が考えてくれたの、実は。

小磯先生…日置さんや高橋さんと話し
てて軽いノリでね(笑)

3人…えー！知らなかった！へ。

小磯先生…あれには意味があります。
業を起こす(起業)ってみなさん方はど
こかの企業に勤めて安定的に生活するよ
りは、自分がやりたい、そういう活動を
自分が小さくてもいいから社長になっ
て自分がマネジメントできるような形で、
そういうビジネスを自分の力で始めると
いう夢と志をもってほしいね。
十分可能ですよ。

—そうか。ちあきは美容師やって将来、
自分で店やってみたいの？

ちあき…最初はなかったけど関わった



からにはやりたいなって。

小磯先生…美容室は、きれいになる美しくなる、かつこよくなる、そういうお手伝いをするサービス産業ですよ。これは大変喜ばれる大事な仕事だね。そして自分に何が提供できるのか、そのために勉強とか経験をつまないとね。これからですね。

—最後にひと言ずつ今日の感想をお願い。

ちあき…わかんないことだらけだったけど学べたと思います。

小磯先生…1つでも何か残るとね。

まりな…ふだん経験することのないようなことを経験できて、こちら若者に何が大事なのかというのも何となく気づけていい体験ができたと思います。

まさし…今回こういう体験をして自分たちの住んでいる釧路についてもう少し知っておかないといけないなって。今まででそういう考えがまったくなかったたので、もっと釧路を知りたいなと思いました。

小磯先生…お手伝いしますよ。こうや

ってお話できたのも大切な縁です。何か相談あったら遠慮なく。

まさし…はい。さっき言ってたネットの写真を撮って、そういうこと…ちよつとやってみたいなど。

小磯先生…そうだね。ぜひね。

こんな魅力のある町なんですよと発信するだけでいろんな人が今見ているからね。できることから挑戦してください。

—不安だったけど何とか取材になったし、いろいろ知ることができたね。

今日はありがとうございました。

3人…ありがとうございます。

小磯先生…どうもどうもお疲れ様でした。楽しかったですね。

帰り道…

家まで送るときに、ふだん寡黙なまさしが自分から話し始めました。

「実際、やってみたい…。自分のパソコン持ったらマジでホームページとかつくったり、写真撮ったりしてみるかなあ」

明らかにワクワク感が伝わってきました。

小磯先生との対話を通して自分の少し先の人生がリアルにイメージできたようでした。2人でお互い自分が冬月荘に来てからどうなったか、今どうなのか、いろいろ語り合いました。

「誰かが…ではなく、自分に何ができるのか？」その感覚が生まれるときを共有できるうれしい機会となりました。

今回は3人の盛り上げ役でついて行ったのですが、あまりの緊張感に最初はどうなることかと思いました(笑)。小磯学長がご自身の学生時代のエピソードを織り交ぜながらお話を始めると、みんなと一緒に僕も「へ〜」の連続で、自分の役割を忘れて聞き入っていました(笑)。それもそのはず…今から5年前の自分を振り返ると、車の板金塗装の仕事をしていました。塗料がついた作業服を着て、狭い工場のストーブの側で10時と15時には友人である社長と、片手に缶コーヒー、片手にはタバコというスタイルで「しっかしな〜」ってほとんど無意味に口癖のようにぼやいていました。しかも新聞やニュースから入ってくる情報でけっこう社会のことを知っているつもりで偉そうに(苦笑)。その後、ハローワークを通じてNPOへ転職した僕に、とても身近でリアルな社会を教えてくれたのは冬月荘で出会った若者たちでした。みんな最初は話しかけても頷く程度の反応でした。まさしが以前言っていましたが、大人が苦手だった…まさに当時はそんな感じでした。出会ってから若者たちは14歳〜18歳を過ごし、僕は33歳〜37歳を過ごしてきましたが、一緒に考えて育ってきた(?)僕らがともに小磯先生の話を聞いたことは、貴重な出来事になりました。釧路は本当にきびしい地域だけど、小磯先生のお話にあった、「一人ひとりが自分のこととして考えることができる社会」になるように、若者と大人が出会う、こんな機会の大切さをまたまた実感したのでした。(タカさん)





まじくるんからの見えないプレッシャーにさらされながら、何とか刊行にこぎつけることができました。短時間の中で執筆や取材にご協力いただいたみなさん、本当にありがとうございました。次は定期刊行物として続くように努力するのみです。(ひおP)

ついにまじくるが本に！インタビューしたり、画像、イラストなど素材を依頼、集める役回りでしたが、なまら面白い本になるわぁ！とワクワクしながら携わりました。やっぱりまじくらなきゃ！ありがとうございました。(タカさん)

まじくるな人に会くと、いつも、とびきりうれしくなった。活動も個性もさまざまだけど、みんな、カラリと笑って話してくれた。こんなふうに、ごきげんな実践者があふれる社会はやっぱりおもしろそうだ。私に何ができるかな。たくさん、たくさん背中を押してもらった気がする。まじくるなみなさま、ありがとうございました！(ゴンザ)

編集アクター

【編集スタッフ】 日置真世 高橋信也 庄司美乃里 まじくるん

【原稿執筆協力】 朝比奈ミカさん・又村あおいさん

【取材協力】 湯浅誠さん、一般社団法人社会的包摂サポートセンター関係者のみなさん

北島明日佳さん、菅原志帆さん、佐藤雅俊さん、高橋亨枝さん、

弓田春菜さん、井澤勇揮さん（以上、東北福祉大学学生）

須田美喜さん・須田順子さん（女川町）

大石亜紀子さん（株式会社スタートトゥデイ）；

池谷啓介さん（大阪箕面市 NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝）

小磯修二さん（釧路公立大学）

上田麻里奈さん、岩田千明さん、木内雅史さん（以上、釧路の高校生）

【イラスト協力】 深田堅二さん・加藤開さん

【デザイン】 石原雅彦さん

平成23年度厚生労働省社会福祉推進事業 地域セーフティネット体制づくり推進事業

社会・地域・暮らしをつくりなおすマガジン まじくる

発行日 2012年2月25日

発行 特定非営利活動法人地域生活支援ネットワークサロン

<http://n-salon.org/>

連絡・お問い合わせ先

〒085-0824 釧路市柏木町2-8

電話 0154(42)2420 地域起業創造センターまじくる

E-mail center@n-salon.org

予告

「支援する側？支援される側？」

一般的には実践現場では支援する側（スタッフやボランティア）、支援される側（利用者、支援を必要とする人）の役割は決まっているもの。でも、全国元気な実践をみると往々にして「どっちが支援されているのか？ 支援しているのか？」がわからなくなるような場面に出くわします。そんな「支援する、支援される」のなぞに迫るべくさまざまな現場を訪ねて「支援をしている人」と「支援をされている人」のペアにインタビューする企画を遂行中です！

求む！

まじくる実践事例

全国で地域の課題を解決するために、生活当事者が主体となったり、いろいろな人たちがごちゃ混ぜになったりしているおもしろい実践を探しています。何だか知らないけど「おもしろい」という実践の情報をお待ちしています。

求む！

生活のお悩み

次号は新企画「まじくるんの何でもお悩み相談コーナー」を開設予定です。既存の制度の縦割りを乗り越え、専門分野のタコつぼ化をも脱出し、それだけでなく、既成の概念、価値観や発想までも横断的でニュートラルなまじくるんがあなたのお悩みに愉快にお応えします。素朴なお悩みをお待ちしています。

求む！

その他のネタ

この怪しい雑誌が継続するためには、みなさんからの情報や企画アイデア、応援メッセージ？！ はたまたいろいろなご協力（資金援助、文章・絵、デザイン、取材、その他何でも）が必要です。つくるプロセスも「まじくる」ためにその他いろいろなネタをお待ちしています。



社会・地域・暮らしをつくりなおすマガジン

まじくる



平成 23 年度厚生労働省社会福祉推進事業
地域セーフティネット体制づくり推進事業

社会的包摂とは？



社会的包摂とは何か？

湯浅誠さんに 聞いてみた



●社会的包摂という言葉をよく聞きますが、どういう意味かわかりやすく説明していただけますか？

ひと言でいうと、社会の組み替えです。

何のために社会の組み替えをやるのかというと、今ある公的・私的ネットワーク（セーフティネットと言ってもいいけど）、それから漏れてしまっている人

がもう一回社会参加が可能になるようにするためです。

既存の公的・私的なネットワークやセーフティネットというのは、たとえば公的なセーフティネットは社会保障制度などだし、私的なセーフティネットやネットワークというのは自治会とか地縁組織とかそういうもんです。今、そこから落ちる人がいっぱいいるということです。

そういったセーフティネットが基本

的に制度疲労を起こしている状況にあります。制度疲労というのは、実際の社会の動きについていけなくなっている、実際の社会の動きに対応しきれていないということです。家族の形の変容とか地域の支える力の弱まりとか言われますよね。それも、私は広い意味での制度だと思う。たとえば、自治会が新しく地域に入ってきた人たちを網羅できないとか、家族制度や男女関係が固定的であるためにDVの加害者や被害者を生み出しちゃうとか。家族はこうあるものとか、地域はこういうものとか、社会保障って誰のためのものとか、多くの人が思っているイメージがあるのですが、それと現実がズレてきている

ところで、社会保障って誰のためのものだと思いますか？



●社会で生きてる人、みんなのためのものじゃないですか？

みんなはそう思っていないと私は思う。一般的には、社会保障っていうと…一般的という言い方もおかしいね。ある年齢以上の人たちと言いましょ。私より上ぐらいの人たちは、社会保障という（この場合は福祉といってもいいので

